
魔法少女リリカルなのは 幻想郷の白き魔女

ひろっさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 幻想郷の白き魔女

【Nコード】

N1890P

【作者名】

ひろっさん

【あらすじ】

オリジナルキャラ女主人公の転生もので、習作、あるいは実験作です。

オ리지にチート要素が入ってます。

僕が考えるアルハザードの解釈みたいなもあります。

ガチバトルはあんまり入ってません。

どのくらいのダークネスなら許されるのか、っていうことを探っている作品なので、当然ながらそういう表現も出てきます。

以上のことにご注意下さい。

なお、話は今のところ原作1期からA'sまでです。

第1話、希白の少女

ずっと。

眠っていた。

『おかえり』

と。

言ってくれる人。

を。

夢想しながら。

心のどこかでは。

そんな人はいない。

ことを。

存在し得ない。

ことを。

理解。

していた。

『時の庭園』。

ある1人の少女の体が、不意に動いた。

床に横たわる真っ白な少女。

短い髪の毛は真っ白で、透き通るような肌は真っ白で、瞳まで白い。

床に手を付き。

「う……あ……」

起き上がるうとするが、足に力が入らないのか、顔からべちゃ、と床に突っ伏する。

まるで、生まれたての小鹿のように。

「大丈夫？」

金髪の幼い少女、フェイトが駆け寄った。

「あ……？」

白い少女は顔を上げて目を見開き、駆け寄ってきたフェイトの顔を見詰める。

「どうしたんだい？フェイト」

オレンジ色の長い髪を持つ、犬耳の女性アルフが近付いてくる。

「あ、アルフ、この子……」

フェイトは女性に対し、困った視線を向けた。

「誰だい、この子？」

「わからない。けど、ここに倒れてた」

「ふーん……」

アルフは思案する。

これから第97管理外世界へ赴き、『ジュエルシールド』という『ロストログア』を探してこなければならないのだ。

本来、こんな次元漂流者だか判らない少女に構っている暇など無かったのだが。

だからといって、ここに放置するわけにはいかない。

「みつどご、みつどちるだ……」

白い少女がそんな言葉を口にした。

そして、青い魔法陣が少女の足元に広がる。

「フェイト、離れて！」

アルフは身構えながら鋭く叫んだ。

「う、うん」

教育係に鍛えられてきたせい、幼いながらすぐにフェイトも対応してデバイスを構える。

攻撃されるのかもしれないと思ったのだ。

「ベッシーマン
“ 翻訳開始 ”」

しかし、予想に反して詠唱は短く、青い魔法陣も2人が距離を取るとすぐに消えていく。

「あ、あー、うん。いきなりごめんなさいさ。ミッド語はちょっと発音がおかしくなるから、翻訳魔法を使ったさ」

声の調子を確かめ、白い少女は座ったままぺこりと2人に対して頭を下げた。

アルフとフェイトは互いに顔を見合わせる。

『次元漂流者？』

『はい』

『殺しなさい』

『え？』

『それは敵よ。さっさと殺しなさい』

『でも……』

念話は一方的に切られる。

さすがに、何も知らない少女をいきなり殺せと言われるとは思わなかった。

この時はじめて、フェイトに母に対する疑念が生まれる。

「ごめんなさい」

ピュア、と名乗った白い少女にフェイトは申し訳なさそうに謝る。
殺せといわれたことを、素直に話して謝った。

「フェイトがそんなことする必要ないよ！」

アルフが叫ぶ。

今までだって、散々虐待してきたのに、これ以上罪まで押し付ける
気か。

彼女はプレシアの元へ殴り込みに行こうとした所をフェイトとピュ
アに取り押さえられた。

「えっと、わたしを殺すのは、1つだけ問題があるさ」

ピュアは真面目に言い出す。

「問題とか……ピュアはそれでいいのかい!？」

「落ち着くさ。わたしも死にたいわけじゃないさ」

「うん。それでピュア、問題って？」

フェイトが落ち着いて話の先を促す。

「わたしは『ウィジャボード』の安全装置さ。だから、死ぬ瞬間に
転生して、肉体を修復するさ」

ピュアは話した。

「それって……」

アルフは息を呑む。

『ウィジャボード』なるものが何なのかは知らないが、安全装置と
言うからには危険なものなのだろう。

その装置の一部ということは、人間ではない、作られた存在。

「だから、本当に死ぬわけじゃないさ。もう何回も、経験してきた
さ。さつきみたいに。だから、平気さ」

真つ白な少女はそう言って笑う。

自分を殺すというのは、もう一度転生させるということ。

実際に死に至るわけではないから。

罪にはならない。

悔いる必要も無い。

だから。

『さあどつぞ』

と。

フェイトの決断は。

ピュアをこつそり第97管理外世界に連れて行き、そこで預かって
もらえる所を探すことだった。

プレシアはおそらく、『時の庭園』の場所が判明するのを防ぐため
に殺せと命じたのだろう。

アルフはそう考えていた。

一体、誰に知られないようにしなければならないのか。
真っ先に思い浮かぶのは時空管理局。

次元世界の警察機構。

つまりプレシアは、法に反するような事をやろうとしている。
それが何なのかは判らないが、自分が敬愛する主を関わらせて良い
ことではなさそうだ。

「フェイトちゃん、アルフさん、ごはんできたさー！」

聞こえてきた声にアルフは脱力する。

高層マンションの一室を借りて、そこを拠点に活動する予定だった
のだが、ピュアの引き取り先を探す余裕などあるはずも無く、未だ
にあの真っ白な少女はここに居座っているのだ。

しかも、おそらく『ロストログア』と推測される『ウィジャボード』
の一部として作られた、というのは伊達ではないらしい。

つまり、魔導師として非常に優秀なのである。

自分のデバイスこそ持っていないが、高い魔力と未知の魔法があり、
適応力も高く、決して油断はできない。

ただ、惜しむらくは壊滅的な運動神経と体力の無さだ。

そして攻撃魔法の適性が皆無。

それを補うのが『ウィジャボード』なのかも知れない、とはフェイ
トとアルフの共通認識。

ちなみに、最後の推測以外はピュア本人が話したことでもあった。

フェイトは、ピュアの行動に何の疑問も持っていなかった。

死ぬほどの傷を負っても、死なない。

ここではないどこかへ転移し、時間をかけて傷を修復して、蘇るだけ。

そっという風に作られた存在。

擬似的な不老不死。

だから、あの場で殺されていても、本人的には良かった。

でもそれは寂しい。

せつかく、魔法を封印していれば幸せに生きられる場所に転移したのなら、幸せな生活を送ってもいいはず。

その想いが、フェイトにピュアを疑うという心をなくさせていた。

アルフはもしも、と考えている。

相手が冷血ではないのなら、ああ言えば簡単に殺せるわけがない。

『ウィジャボード』と何の関わりがあるのかは知らないが、あの場ではあのハツタリで充分だった。

あれが演技だったのだとすれば、危険かもしれない。

何を考えているのか、判らないから。

何が目的か、読めないから。

しかし。

今は『ジュエルシード』搜索の手伝いまで買ってくれている。

主であるフェイトが『ジュエルシード』集めに頑なである以上、手伝ってもらえるのなら、素直に有り難かった。

こうして、イレギュラーを抱えた歴史は改変を余儀なくされていく。

第2話、隠蔽された苦痛

「――、――」

高く。

青空のように澄んだ。

流れるような詠唱が紡がれる。

3つの円を頂点とした三角形。

それが二重に交錯するように回転している。

見た事もない、不思議な形の、青い魔法陣。

アルフに解るのは、ミッド式ではないということ。

『ロストロギア』の一部として作られた、彼女、真っ白い少女は、ミッド式魔法体系の外にある魔法を使っている。

「エエイマムコ 広域探索開始」

詠唱完了と同時に不安な気持ちになるのは何故だろう。

ピュアの説明によると、彼女の出身世界は周囲の世界とは違う、独自の魔法体系を持っていたらしい。

魔法陣は魔力を展開してある程度詠唱を省略するために、複雑なものが使われる。

それと、次元世界が閉鎖されていたので、デバイスの技術が入って来なかったようだ。

だから、彼女の魔法はプログラム式に対応していない。

大きな魔法は、一々、長々と詠唱する必要がある。

つまり、高速戦闘には向かない。

もしも戦いになっても、問題なく取り押さえることは出来そうだった。

全く違う魔法体系ということで、何が出てくるか解らないという部分はあるのだが。

「どうしたの？」

フェイトに声をかけられ、アルフは思考を現実に戻される。

「ああ、ちょっと考え事をしてただけだよ」

「そう」

既に探知は終わっていた。

話を聞くと、街の外れの森に、発動しそうな『ジュエルシード』を見つけたとのことだ。

ろくに飛行魔法も使えないピュアは、ここで待機。

というよりも、広域探知魔法を使ったことによる肉体への負荷のせいで、肩で息をしている。

ピュアの魔法は性能が高い代わりに、前準備が長かったり消耗が激しかったりするようだ。

「いつてらっしゃい」

飛び立つフェイトとアルフに、ピュアは声をかける。

「……うん」

フェイトは短く頷き、黒いバリアジャケットを展開して、飛行魔法

で宙を舞った。

なんだか、胸の奥にもやもやした違和感を感じる。
決して不快ではない、弱い違和感。
フェイトは深くは気にしなかった。

危なかった。

屋上から部屋に戻り、ピュアはうずくまる。
全身から嫌な汗が出てきた。
この、魂を削られるような感覚だけは、どうしても慣れることができない。

比較的捜しやすかったのは、幸運だったと言っていい。
もう少しでうめき声を上げる所だった。
それが幻覚なのは承知している。

何十回と繰り返してきても、未だに克服できない幻影の苦痛。
ピュアは、広域探索魔法を使つた^{いまわ}びに、体がそれを思い出すのだ。
今際の苦痛を。

今は『ウィジャボード』によって守られているが、精神的な外傷に
までは対応してくれない。

金髪の少女フェイトと、使い魔であるオレンジ色の毛並みの狼アルフ。
互いに強い信頼感で結ばれていて、家族のように互いを大切にしている。

フェイトはピュアのことを疑っていない。

それは優しい性格であるのと、実戦経験に乏しいところがあるから。

アルフは完全に信用していないけれども、敵に回っても問題ないと思っ
ているから、放置している。

実際その通りだし、それでいいと、ピュアも思う。

.....

いつの間に眠っていたのか。

床で寝ていたためか、節々が痛い。

もそもそと起き出して、冷蔵庫をチェックする。

昼食には充分だけど、夕飯には足りない。

また、アルフをお願いして買ってきてもらわなければ。

眩暈。

まだ回復していない。

広域狭域に限らず、探査系の魔法を使うたびに、精神外傷トラウマに掻き回

され、衰弱する。

壊滅的な運動神経も、体力が皆無なもの、原因はそれだった。

動きたくとも動けないという生活が続いたのだ。

体が上手く動かないのも、仕方がない。

一つ目、初めて手に入った『ジュエルシード』のことを、フェイトは複雑な心境で考えていた。

発動はしていても、『ジュエルシード』の発動体である巨大化した猫を守るうとしていたのは、白いバリアジャケットの幼い少女。管理局というわけでもなさそうだったけど、すでに幾つか集められているようだった。

（あの子にも大切なものがあるのかな）

思う。

フェイトの目的は、母プレシアがそれを求めるから。

ある日を境に変貌してしまった母を、元に戻せるかもしれないから。

『ジュエルシード』は願いを叶える青い宝石。

ならば、母を戻すことも出来るかもしれない。

同時に、あの白い服の少女にも、似たような理由があるのかもしれないと、フェイトは思った。

もつとも、こちら譲る気はまったく無いが。

使い魔のアルフと一緒に、拠点にしているマンションに戻る。

ドアを開けて、弱い違和感。

リビングに誰もいない。

「ピュア、どこかな？」

フェイトはつぶやく。

「買い物にでも行ったとかじゃないかい？」

アルフは言う。

あまり心配はしていないようだ。

フェイトも、深くは心配していなかった。

自分の年齢に近いくらいの少女だが、頭は悪くないし、必要の無いところで無理はしないだろう。

と思って、しばらく休もうと寝室に入ると、寝息を立てている白髪の少女をフェイトが発見した。

広いマンションを借りれば嫌でも目につく、という教育者の気配りで、寝室は1つしかない。

ふ、と笑みが零れる。

作られた存在。

兵器の一部。

それでも、この少女はまだ子供なのだ。

フェイトは構わずベッドに入り、ピュアと抱き合っようにして横になった。

人肌の温かさが心地良かった。

第3話、疑念と片鱗（前書き）

かなり走ってます。

第3話、疑念と片鱗

あれから何日過ぎただろうか。

ピュアの探知魔法の御蔭で、『ジュエルシード』が4つ手に入った。

1つは、海鳴温泉という、宿泊施設の近くの川の中。

1つは、街の外れの貯水池の中。

1つは、少し離れた森の中。

1つは、低いビルの屋上。

温泉宿では、以前ぶつかった白いバリアジャケットの少女との戦いになり、『ジュエルシード』を1つずつ賭けた戦いを行なった。

それに勝利し、さらに1つ手に入っている。

これで、合計6つ。

ピュアが広域探索魔法を使うたびに、『ジュエルシード』が見付かっていると言っても過言ではない。
しかし、ピュアの体調が良くない。

この真つ白な少女は、偶然『時の庭園』に出てきただけの、次元漂流者。

フェイト達に協力する義理は無い。

それでも協力してくれてはいるが、無理はさせられない。

「街の中。あの大きいビルの近く」

白髪の少女は顔色が悪くとも、弱った姿を見せない。

広域探索魔法を使った後はいつも寝込んでいるのに、倒れる瞬間を

決して見せない。

「大丈夫？」

「だいじょうぶ……今度は、フェイトちゃんが前に言ってた子が近くにいるさ。急いで……」

「う、うん。無理しちゃ駄目だよ？」

フェイトは少し慌てる。

ここで相手に奪われるようなことになれば、無理を押しして広域探索を行なってくれているピュアに申し訳が立たない。

「いつてらっしゃい」

「いつてきます」

最近、こういう何気ない挨拶もきちんとするようになった。

ピュアはベッドで目覚める。

いつものことだ。

連日、『ジュエルシード』を集めるために、広域探索魔法を使っているから。

まだ気分が悪い。

違和感。

何かがいつもと違う。

ピュアの体は、まだ目覚めるべきではなかったと告げていた。

そして、何故目覚めたのかを感じ取る。

『自分の暮らしている街や、自分の周りの人たちに危険が降りかかるのは嫌だから。これが、私の理由！』

いつ以来だろうか。

理屈、自分の正義をかなぐり捨てた、感情の発露。魂の叫び。

いつそ心地良い、強い少女の心。

以前、フェイトが話していた魔導師の少女に間違いない。

感じるのが、こういう心ばかりならいいのに。

次に感じたのは、心と心のぶつかり合い。

場所が近いからか、それほどに激しい戦いを演じているからか。

ピュアの『精神感応』は、フェイトと、高町なのはという魔導師の少女の、心の在り方を感じ取っていた。

それは、押し殺された感情の声を感じ取る能力。

一般的には『レアスキル』と呼ばれるもの。

信用できる人が引き取ってくれるまでは、ある程度、この能力の封印を緩くしていた。

間違いなく、フェイトは信用できる。

母への気持ちと、ピュアへの気持ちは純粹だった。

それに、戦っている相手の魔導師、高町なのはも。

家族や友人達を守りたいという気持ちに偽りは無い。

しばらくして、爆発的なエネルギーの高まりを感じた。
『ジュエルシールド』が、内包する力を解き放つたらしい。

あれはおそらく、代償無く願いを叶える物を作ろうとした慣れの果て。

大きなエネルギーを小さな器に押し込め、フェイトが持っている『バルディッシュ』のようなもので制御しようとした。

しかし、その力を制御し切ることはできず、登録されている術式では叶わない願いに対しては、願った者を取り込んでしまうように出来てしまった。

それでも、注意して扱えば有用だったのだろう。

あるいはエネルギーを閉じ込めておくための機構が暴走した結果が、偶然『願いを叶える』という形になったのかもしれない。

いずれにせよ、正しい扱い方を知らなければ、願う者に牙を剥く危険な代物には違いなかった。

そして、思う。

フェイトの母親は、『ジュエルシールド』をどう扱ったものなのか、と。

しばらくして、フェイトがアルフに抱えられて戻ってきた。

時々、心の声が聞こえてきていたが、相当無茶をしたらしい。

バリアジャケットは所々が裂け、手は傷だらけだった。

「わたしは魔力回復の結界を張るから、傷の治療お願いしていい？」

「でもあんた、まだ回復してないんじゃない……」

「これ位なら平気さ」

「ピュア……」

アルフの心が揺れる。

「お願いさ」

ピュアは押し通した。

「キレテナイ 回復結界展開」

なぜか、残念な気持ちになる。

アルフは疑念を持った。

ピュアが回復結界を張っても、それだけでピュアは寝込んだりしない。

独自の広域探索魔法が身体に負担をかけるとはいえ、回復結界も相当に高い効果を誇っていた。

少し準備と詠唱に時間はかかったが、アルフが傷の治療を施す前に、フェイトの魔力は回復していたのだ。常識を飛び越えたような効果の魔法。

しかし、ピュアは倒れたりはしなかった。

広域探索魔法と超回復と言っているいい効果をもたらす結果。

そのあと、確かにベッドに潜り込みはしたものの、それはむしろ、広域探索魔法の回復が中途半端だったからと言う印象を受けた。眠っている時間がいつもと大して違わなかったのも、疑問を抱かせ

るには十分な材料になっていた。

広域探知魔法と回復結界。

一体何が違うというのだろうか。

隣が温かい。

心地良い。

悲しみに沈んだ心が癒される。

あの白いバリアジャケットの少女は、街や大切な人を守りたいから、
と言った。

フェイトは、母のため。

母ブレシアに、笑ってほしいから。
いつかのような温かい日々を、取り戻したいから。

「う、あ……て」

そのとき、ピュアがぐもった声を上げる。
見れば、息苦しうに呼吸が浅い。

「お……わ……を……こ……て……」

ピュアが寝言を囁く。

「え？」

聞き違いかと思った。

否、聞き違いであってほしかった。

『おねがい、わたしをころして』

と。

聞こえた。

第4話、絶望の都（前書き）

ダークネスはここから本格的に入ります。

フェイトもなのはもピュアの秘密は知らないという事で通します。

第4話、絶望の都

鏡。

そこには黒髪の少女が映っていた。

場所はアルハザード。

古の、超技術世界。

同時にそこは絶望の世界でもあった。

この頃から、目は白かったように思う。

死から蘇った代償の1つであった。

今でこそ、魔法によって得た擬似視力の御蔭で生活に支障はないが、昔は何も見えなかった。

だからこの記憶は、擬似視力魔法に慣れるためのリハビリの最中のものだろう。

髪が黒いうちに、擬似視力に慣れることはなかったから。

母は狂喜した。

そして、絶望した。

その理由は幾つかある。

強いて挙げるなら、アルハザードとは、魔法技術の限界という現実を、まざまざと見せ付けられる場所でもあった。

不老不死になることは出来る。

しかし、それは死ぬこともできずに、永遠の刻を苦しみ続けるという意味。

しかも、苦しむ理由がおまけで付いてくる。

安易に縋れば、身を裂くような後悔を味わう。

かつては狂喜した母親に、懇願したことがある。

「おねがい、わたしをころして」

と。

目が覚めて、しばらくぼうつとしていると、ピュアの様子を見に来たフェイトが、少し悲しそうな顔をして、夕食を告げた。

（話さないと、駄目かな……）

ピュアは悲しげに微笑み返す。

予想に反し、フェイトも、アルフも、夕食の時は何も言わなかった。明日、2人は一度、母プレシアの下に、『ジュエルシード』探しの進捗状況を報告に行くのだと話す。

ピュアは、その時のアルフの心の動きが気になった。

いつでも心の声が聞こえるというわけではないが、至近距離なら感情の動きを感じ取ることはできる。

焦っているような、怒っているような、悲しんでいるような、諦めのような、複雑な気持ち。

それは顔にも出ていた。

だから、放っておけなかった。

「わたしも行きたいさ。フェイトちゃんのお母さんと、お話がした

いさ」

「ダメ、殺されちゃうよ！」

ピュアの言葉にアルフが強く拒否する。

フェイトに対して、以前はためらいなく『殺せ』と命じたのである。直接会うとなれば、直接殺されるかもしれない。

そうなれば、またどこか遠くに転生することになる。

しかし、ピュアは頑として聞かない。

「わたしは、アルハザードに行ったことがあるさ」

「え！？」

「だから、研究で忙しい人も、絶対に手を下したりは出来ないさ」

ピュアはにっこり笑う。

信じるかどうかはともかく、確かに強烈なインパクトのある言葉だった。

「嘘だつたら、死より恐ろしい目に遭わせてあげるから、覚悟なさい」

ピュアに目を向けた黒髪の魔女プレシアの第一声は、死刑宣告に近かった。

それに対して、真っ白な少女に向けられた懷疑の視線に怖気付くことなく、ピュアは言い放つ。

「わたしは、一度死んで、アルハザードで蘇った人間さ。だから、それを目指す人に、話さないといけないことがあるさ」

フェイトは交えていない。

プレシアの心を読んだピュアが、先に下がらせた。

「あなたが話さなければならぬのは、そこへ到る方法だと思わない？」

それが存在するなら、行き方だけをさっさと話せ。

プレシアは遠回しに脅す。

「そうやって辿り着いた人は、最期にアルハザードを『絶望の都』と呼ぶさ。わたしのお母さんみたいに」

ピュアは屈しない。

「失礼ね、同じ失敗をすることも思っているのかしら？」

「同じ失敗も何も、わたしと同じ方法以外に人を蘇らせる方法はないさ。少なくとも、アルハザードには」

ピュアが説明したのは、要は人間とは別の存在として生み出すということだった。

エネルギーの結晶体を身体に埋め込み、同じ記憶と人格を持った、兵器に改造してしまう。

多かれ少なかれ、変わってしまうのだ。

「つまり、あなたは兵器に改造されている、そういうこと？」

ピュアは頷く。

要は心臓の代わりにエネルギー結晶体を使うのだ。
強大な力を得て、発現しないはずのレアスキルを発現させる。

「あなたの能力はなに？」

「『精神感応』。頭の中に、勝手に他人の感情とか、心の声が流れ込んでくるさ」

ピュアは話す。

『発現しないレアスキル』とは、本来それを制御する力が無いゆえに、無意識に封じられている能力である。

それを無理矢理発現させれば、その能力に振り回され、最悪精神崩壊を起こしたり、死に至ったりする。

その人に適合するエネルギーなら、そこまで酷いことにはならないかもしれないが、結局のところは試すしかない。

こればかりは、アルハザードの技術では解明できなかった。

さらに、ピュアの無限転生は、アルハザードにあった中では一番マシな部類の、兵器化の副作用である。

精神が壊れようが、蒸発しようが、死ねば肉体を修復し、転生する。一種の不老不死ではあったが、転生する先の世界を選ぶことは出来ない。

その時その時の、運命の悪戯に翻弄されるしかないのだ。

ピュアの場合、母親が過敏な『精神感応』を封じるために、『ウィジャボード』に組み込んだ。

『ウィジャボード』とは。

本来、感情の種類を選択的にシャットアウトすることで、精神感応系の能力や魔法を封じる装置である。

しかしそれは、同時に検索魔法と併用することで、超次元探索を行い、接続することができるといふ代物でもあった。

地点ではなく、人物を対象に魔力爆撃を行うことが出来るシステムだったのである。

ピュアの母親はそんな使い方に気付かなかったが、悪用しようと思えば幾らでも悪用できるものなのだ。

接続された人物への攻撃はありとあらゆる防御を無視してしまう。

ゆえに、アルハザードに流れ着いた別の研究者によって一度だけ使用された。

目的は、敵対していた人物の抹殺。

そこでやっと、母親はその使い方に気付いた。

そして、一番の問題も見付かる。

『接続』とは、ピュアの能力を利用したものである。

つまり。

その方法で殺された人物の、死に際の苦痛が逆流するのだ。

ピュアの黒髪が真っ白になったのは、その時の精神的な外傷が原因である。

また、広域探索魔法に体が強い拒否反応を示すのも、その時の体験が原因にあった。

保護者も失い、いつまた、兵器として利用されるかもしれないと、あの時の苦痛に怯えながら、死ぬこともできない。
まさに無限地獄。

「わたしは、アリシアちゃんに、わたしと同じ目に遭ってほしくな

いさ」

それは、この真っ白な少女の魂の声。

「でも、もし、アリシアちゃんが『殺してほしい』って言ったら、殺してあげてほしいさ」

ピュアは、俯いて。

その鼻先から、透明な雫が落ちる。

そのとき、ピュア本人も、プレシアも、その目が潤んでいたのだという事に気付いた。

今まで。

アルハザードに行けばアリシアの失われた時間を取り戻せるのだと、信じて疑わなかった。

それが心の支えにしてきた信念。

それしかないと思い、娘の姿をした出来損ないの人形を使い捨ての駒にして。

すべてはそのためだったはずなのに。

他に、娘を蘇らせる方法は無かったから。

ピュアが声も無く涙を流す姿に、同じく真っ白に変わり果てたアリシアの幻が重なった。

もしも。

もしも。

それが、結果として娘を死よりも恐ろしい、無限の地獄へ突き落とす行為だったのだとしたら。

自分は立てなくなる。

自分の身を裂き、ハラワタをこねくり回した方がマシだ。

第5話、考察、失敗の原因（前書き）

医学系、研究、考察が中心です。

第5話、考察、失敗の原因

ピュアが無事に戻ってきた姿を見て、フェイトはほっと胸を撫で下ろした。

「母さんは、なんて？」

問う。

「しばらく、1人にしてほしいって」

答える。

「見直したよ」

アルフが言った

「実際、抵抗なんてできやしなかったんだろ？」

「わたしは死なないさ」

ピュアは寂しそうに笑った。

「私は……ピュアは死なないかもしれないけど、このまま離れ離れになるの、私は嫌だよ」

感じる。

心地良い、フェイトの優しさ。

あたたかな、心。

不覚にも、涙が出そうになってしまふ。

地球に戻ってから。

ピュアは突然、『ジュエルシード』について、研究を始めた。バルディッシュのデータから、『ジュエルシード』がどういった条件で発動し、どういう形で願いを受けているのか、レポートにまとめる。

その間、もちろん、『ジュエルシード』集めに協力していた。

「うん、これ、デバイスっばいさ」

ピュアはものの数日でそう結論付ける。

『時の庭園』への帰還の前日、魔力の激突によって暴走した際。その時は、次元干渉型のエネルギーが魔力を呼び水として不安定になり、封印を破った結果、暴走に至ったと考えられる。

願いを叶える機能については、構成が甘いながら術式が封入されており、その術式が可能な範囲で願いを叶えるように出来ているようだ。

ただ、術式の構成に不備があり、特定の願いに関しては生物を取り込んで暴走するようにもなっていた。

また、思念体という概念がコンセプトに含まれており、生物を取り込んでいないのに人を襲ったりしたのは、いわゆる幽霊などの思念体を取り込んだため。

ピュアはもしかすると『ジュエルシード』のような、中途半端な願望器なら、アリシアに埋め込んでも波長を調整したりできるかもしれないと考えていた。

しかし、術式の構成の甘さから、断念せざるを得ないと感じる。

ピュアのようなある程度安定した兵器にすら、ならないかもしれない。

少なくとも、彼女が知っている技術では不可能だろう。

「うーん……」

ピュアは唸る。

何か方法はないかと、魔法が無いわりには発展している地球の技術に目を向けた。

「ピュア、ごめん、管理局が来た」

数日後、フェイトが青い顔をしてピュアに言った。

時空管理局。

『ジュエルシード』のような、危険な古代遺失物『ロストログア』を管理、封印したり、魔法を悪用したりする魔導師を取り締まる、次元世界の警察機構である。

公の機関であり、今回はおそらく、『ジュエルシード』をどうにかして悪用しようとしているフェイトやプレシアが、犯罪者として逮捕されることになる。

これ以上、ピュアがフェイト達に協力するのなら、ピュアまでもが犯罪者として捕まってしまう。

無論、大いに助かつてはいるのだが、これ以上この件に協力させるわけにはいかなかった。

「フェイトちゃん、『時の庭園』まで送って」

ピュアがそんな事を言い出す。

「そんな場合じゃないんだよ!」

「『ジュエルシード』は、今ある数で充分さ」

「え?」

「わたし、プレシアさんから、研究してる内容をちよつとだけ聞いたさ」

「だから、『ジュエルシード』を研究してたのかい?」

「うん」

「8つで足りる?」

「半分でも充分さ」

ピュアの提案に、プレシアは目を丸くする。

基本はフェイトが作られた人造魔導師の技術を流用する。

それと、地球にあった、心臓を移植する技術。

必要なのはそれだけだ。

元々、フェイトはアリシアのクローン体である。

記憶を魔法で移植したものの、細かい癖や魔力資質を完全にコピーするには至らなかった。

ピュアはその情報を元に、なぜ失敗したのかを考察。

最初にアルハザード方式を試す為に、願望器としての機能を持つ『

ジュエルシード』について考察した。

おそらく、エネルギー結晶体の性質を変化させることができるようなものだったなら、それを埋め込んだ後にエネルギーの性質を変化させるという、対処療法を考えることができた。

しかし、実際は次元干渉型エネルギーの結晶から術式に使うエネルギーを引き出しているに過ぎず、ピュアのような失敗例にしてしまう可能性が高い。

次に考えた、というよりも、目に留まったのは、地球にある医療技術にまつわる話。

もしも、『魂』と呼ばれるものが、脳にあるのではないとしたら？ そんな考えに辿り着いたのは、心臓移植を受けた少年の話。

心臓移植手術を受ける前と後で、細かい癖や好物などが、がらりと変わってしまったというのだ。

ならば、後は簡単だ。

脳は死んでしまっているため、記憶を移すしかできない。

しかし心臓は？

心臓から記憶を抽出することは出来ないが、あるいはその部分だけならば移植することができる。

そして、新しい体、クローン体を真にアリシアにするために、短期間の内にでも、アリシアと同じ体験をさせればいい。

どうやって？

『ジュエルシード』を使う。

次元干渉型ということは、時間がある程度操作するのに長けているのだ。

それに、『ジュエルシード』そのものはエネルギー結晶体を動力とした、デバイスのようなもの。

術式がある程度弄って、肉体に経験を刻むことは十分に可能。

と、面倒な手続きを踏む必要はあったが、これならば単なるクロインであるフェイトよりも、限界近くまでアリシアに近付く。何よりピュアと同じような失敗は起きない。

ここまでのアイデアが持ち込まれれば、後はプレシア1人でどうにでもなる。

ピュアの独特な魔法による強力な回復結界で、体力を回復させてから、プレシアは1人『時の庭園』の深奥に引き籠もった。

ふと、プレシアの手が止まる。

既に救いようのないところに来てしまったピュアが、自分は可哀相だと思った。

本人に過失は無かった。

ただ、母親はアルハザードに到り、さらに娘を蘇らせることに成功した。

しかし、ある意味ではピュアは失敗作でもある。

あの真っ白な髪や肌、瞳は、母親の失敗の証。

もしかして、母親は娘をこんな体にした責任を取ろうとして、ピュアを殺したのかもしれない。

ところがそれは、無限地獄の始まりに過ぎなかった。

母親には、安易にアルハザードに頼った分の罪はあるかもしれない。しかし、失敗作となってしまった娘に、罪などあるのだろうか。

第6話、決戦を望む者（前書き）

フェイト出生の秘密が明かされますが、原作ほどショッキングな表現にはしていません。

第6話、決戦を望む者

次元航行艦『アースラ』。

フェイトが持っている分を残して、海鳴市付近に落ちていた『ジュエルシールド』はすべて、回収し終えた。

しかし、茶髪ツインテールの少女なのはには、別に解決するべき案件があった。

すなわち、金髪黒衣の少女フェイトとの対話。

ところが困ったことに、数日前から一切、フェイトの反応を感知できなくなっていた。

「どう思っ？」

黒髪黒衣の少年クロノに、深緑色の女性リンディが聞く。

「『ジュエルシールド』の数がもう充分なのか、状況が変わって手を出すことができなくなっているのか……」

「どうも嫌な感じね。向こうは、この『アースラ』と同等かそれ以上の設備を用意していたみたいだし……」

リンディは声に出して呟つぶやいた。

まさか、全く違う体系の魔法を使っているなどとは、知る由もなく。

高価な設備と、クルー総出で探索を行っていたのに、かなり早い段階で1つ、持って行かれたのだ。

残りは、海中で見付かった6つ。

高町なのはが既に集めていたものと合計すれば、13の『ジュエル

シード』が管理局側の手にあった。

しかし、海中のものに関しては、数日前からフェイトという魔導師が現れなくなっただけのもの。

ほとんど競争相手がいない状態で探し回っていたことになる。

数の上ではともかく、管理局が有利に事を運んでいるという雰囲気ではなかった。

「なのはさんも、いつまでもここに留めておくわけにも行かないし……」

リンディは協力者である少女について思いを馳せる。

多少なりとも誘導するような形で協力を引き出しはしたが、彼女も人の親である。

あまり時間をかけているわけには行かないと、焦りを感じ始めていた。

あれほど『ジュエルシード』を集めることに強い執着を見せていたフェイトが、こうもあっさり手を引くとは、思いもなかったのだ。

『ジュエルシード』を集め終わって、既に4日が経過している。

なのはも焦り始めていた。

「フェイトちゃん、もう会えないのかな？」

フェイトとアルフはつい昨日、拠点にしていたマンションを引き払う手続きを行なった。

もう、『ジュエルシード』を集める必要は無い。
だから、地球にはもう用は無かった。

しかし。

心残りはある。

中途半端に終わってしまった、白いバリアジャケットの少女との戦い。

ピュアがフェイトを優しく包み込むように接してくれたように、正面から向き合おうとしてくれたあの少女との決着を着けたかった。

最後に会った時は、時空管理局の介入があったため、中途半端に終わってしまったから。

もちろん、わかっている。

このまま下手な動きをせずに去れば、管理局に見つかるとは無い。ピュアのこと、母プレシアが『時の庭園』にある程度滞在することを許しているようなので、今すぐ引き取り手を捜す必要はなかった。

最善は、このままこの世界から姿を消し、管理局の目の届かない所へ逃げること。

そうすれば、ピュアを匿いながらも充分に生活はできるはずだ。

理屈ではわかっていても、心が納得しない。

フェイトはプレシアに呼び出された。

「簡単なことだったのよ。あなたを作ったのは私。それだけのことに、気付くのが遅すぎたかもしれないわ」

「母さん？」

「フェイト、よく聞きなさい。あなたは、私の娘の、クローンなのよ」

「え……？」

衝撃の事実とは、プレシアの口から語られる。

「私は、アリシアを蘇らせようとした。そうしないと、耐えられなかったから」

「母さん、私は……クローン……？」

「そうよ。私が作り出した、アリシアの出来損ないの人形。失敗作……でもね、フェイト」

目を見開くフェイトの頭に手を置き、プレシアは言った。

「それは、あなたの罪ではなくて、あなたを作った私の罪よ。罰を受けるべきなのは私なの」

これはある少女の、変わり果ててしまった有り様を見て、思い至ったことでもあった。

フェイトをアリシアにすることができなかったのは自分なのだ。仕方なかったは通用しない。

失敗することを知るための準備や方法はあったはずなのだ。

なぜならば、実験とは、失敗するべくして失敗するからだ。何かの見落としがあり、勘違いがあり、理論が間違っていたり。

全部、研究者の都合ではないか。

そして、アルハザードに辿り着いたとしても、できないことはできない。

その無理を通そうとした先の悲劇を見せ付けられては、自分が作ったものに自分の罪を押し着せるような真似ができるはずもなかった。

「ごめんなさい、フェイト。私は自分が受けるべき罪と罰を、あなたに押し付けようとしていたのよ」

皆を集めて。

これからのことを話す。

「3年」

プレシアは言った。

「『時の庭園』は3年間、ここに留めるわ」

アリシアをこの世に蘇らせるために、それだけの時間が必要だと話す。

プレシアの最後の挑戦。

アルフにも、フェイトがクローンだという事は話した。

そのことでアルフが激昂する場面もあったが、フェイトは謝ってもらったこともあるしと、飛びかかろうとするアルフを止めた。

いずれにせよ、プレシアの体が持つ限界を考えても、3年が限度だ

った。

ピュアが使った強力な回復魔法で体力を回復したとはいえ、その身は重い病に侵されている。

病身を騙し騙し使って、ピュアが提示した方法を研究し、アリシアを作り上げる。

これがプレシアの決断。

もちろん、これは管理局の法律に触れる。

それらを話した上で、プレシアはフェイトに自由を与える。

もし通報されたとしても、フェイトにやってきたことを考えれば、その決断を甘んじて受ける覚悟はできていた。

だから、『時の庭園』は3年間動かさない。

フェイトが管理局に行ったことおこなに関しては、プレシアが全責任を負う事になるだろう。

それは仕方がない。

プレシアが『ジュエルシード』の収集をフェイトに命じたのだから、その事実を覆すことはできない。

管理局への説明は事実上、ピュア、フェイト、アルフの3人に委ねられた。

すべての罪をプレシアに押し付けるのも、誰かが罪を被るのも、自由。

ただ、ピュアは次元漂流者であり、純粋な厚意によってフェイト達を手伝っていただけなので、管理局への説明はフェイトとアルフの仕事になる。

本来は。

「『ウィジャボード』、設定変更”」

絶海の孤島で、ピュアは魔法を使う。

幻聴が聞こえる。

それはかつて『ウィジャボード』によって葬り去られた、死者の怨嗟。

ピュアは能力を封印する方向に働いていた『ウィジャボード』の設定を、他者との接続に切り替えた。

「ジユモンガチガイマス
“ 検索開始”」

何かこう、シャレにならない焦燥感を感じるのは気のせいだろうか。

真っ白い少女を包み込むように、球状の魔法陣が展開されている。

これが、『ウィジャボード』の起動形態だった。

アルハザードの魔法体系特有の魔法陣でもある。

少しゃやこしいのだが、ピュアの出身世界の魔法陣は異なり、三角形を重ねたような魔法陣だった。

「オッケーさ」

「大丈夫？」

「大丈夫さ」

「うん」

ピュアから合図が来て、フェイトは目を閉じる。

『ウィジャボード』によって、白いバリアジャケットの少女、高町

なのはと繋がったのだ。

実は体力の問題と、心的外傷トラウマの関係で、そう簡単に使っていないものではないのだが、今はどこにいるかわからない相手に念話を届けたというフエイトの願いに、ピュアは応えた。

ちなみにプレシアはピュアの身の上を話していない。

話すなら、ピュアが自ら明かすべきだと考えたからである。

『ウィジャボード』の設定を変えるだけで精神的な負担になるとか、まさかそんなところから精神的な影響が出るとは、ピュア自身想像もしていなかったことではあるが。

ピュアの体と一体化している『ウィジャボード』の『接続』を目的とした起動は、アルハザード時代以来の2度目である。

『ウィジャボード』は、『アースラ』に施された障壁やプロテクト、次元、距離の一切を無視して、フエイトからの決闘宣言をなのはに届けた。

力強く頼もしい、心と心。

はつきりと感じ取れる、なのはの喜び。

その御蔭か、思ったよりも衰弱は酷くならなかった。

第6話、決戦を望む者（後書き）

次、フェイトVSなのは、海上の決闘です。

第7話、海上の決闘

1対1。

互いに万全の状態から。

ルールを問うのは無粋だろう。

立会い人。

フェイト側、アルフ、ピュア。

なのは側、ユーノ、クロノ。

「一体、どうやって彼女だけに念話を届けたんだ？」

クロノは聞く。

プロテクト

最新鋭の盗聴対策の一切を無視して、1人だけに念話が届いたのだ。

「この子は次元漂流者なんだけど、私達とはまったく違う体系の魔法を使うんだよ」

アルフが簡単に説明する。

ただ念話を届けるだけで、あの後はず時間ほど意識を失っていた。どうやら、身体にかかる負担がかなり大きいらしい。

広域探索魔法、回復魔法と較べても、桁違いに。

しかし、効果は絶大だ。

前準備や詠唱が長つたらしいが、ミッドチルダ式では到底実現できないような範囲や精度を誇る。

彼女は攻撃魔法にこそ適性を持たないが、広域探索魔法も今回の次元間通信についても、異常チートと言えるほどの性能の魔法を持つのだ。

ピュアが『ロストログア』の一部であることは、アルフからは言わない。

そしてピュアも、念話のためだけに『ウィジャボード』を使ったことは話していない。

4人の立会いの下、決闘が始まった。

最初は直射、あるいは誘導弾の撃ち合い。互いに防ぎ、叩き落とし、回避する。

「君はどうして、フェイト・テスタロッサに協力していたんだ？」

クロノがピュアに聞く。

「痛くて、辛くて、苦しくて」

真っ白な少女は言った。

「それでも、差し伸べられる手に噛み付かないといけない。

フェイトちゃんはそれができない子だから、遠慮して噛みつけない子だから、放っておけなかったさ」

ピュアの言葉に、アルフははっとする。

この少女は基本的に頭が良い。

体力的な問題はあれども、管理外世界で里親を探すくらいのことはいできたのだ。

それなのに、マンションを離れようとしなかった。

フェイトとアルフの両方が留守にした隙に逃げ出すこともできただろうに留まり続け、何をどうやったのか、あのロシアからフェイトに対する謝罪まで引き出して見せた。

本人は『身の上話をしただけさ』と肩を竦めていたが、それだけのはずが無い。

アルハザードに行ったことがあり、『ロストロギア』の一部。そして、同じ記憶を持ったまま、無限に転生し続ける。

……………

まさかとは思うが、本当に身の上話だけで？

『ごめん、アルフさん。後で話すさ』

まるで心を読んだかのように、ピュアから念話が届く。謎は深まるばかり。

フェイトとなのはの戦いは、大詰めを迎えようとしていた。なのはの成長に舌を巻いたフェイトが、勝負をかける。

「『フォトンランサー』、フランクスシフト」

巨大な魔法陣が現れ、フェイトの周囲に無数の雷球が出現する。同時に、自分の周囲に無数に現れた魔法陣に気を取られ、なのははリング状の光に手足を拘束された。

「決まった！」

アルフがガッツポーズ。
毎秒7発の魔力弾を連射し続ける『フォトンスフィア』を38基展開する、フェイトの切り札。
合計1064発の魔力弾を叩き込む。

この数の暴力の前には、どんな防御も砕かれて終わる。

「なのは!？」

ユーノが悲鳴のような声を上げた。

「あつ」

ピユアが声を上げる。

それに気付いたのは『レアスキル精神感応』を持つ彼女、唯一人だろう。
嵐のような弾幕に吞まれて、4人からなのはの姿が見えなくなっていたから。

爆煙が晴れた中にいたのは、ボロボロになった白いバリアジャケットの少女。

その瞳には、まだ戦う意思は健在だった。

「なっ、どうして!？」

「途中でバインドが解けたさ」

アルフの疑問に、ピユアは答える。

最初の方を防御魔法で耐え、バインドが解けた時、咄嗟に射撃の軸をずらしたのだ。

爆煙で姿が見えなくなっていたのも、なのはに有利に働いた。

とはいえ、それだけで完全に避けきれないわけではないし、最初の何

割かに耐える事も、簡単なことではない。

「今度はこっちの……」

デイヴァイン

“Divine”

「番だよ！」

バスター

“Buster”

桃色の魔力光が球状に膨れ上がり、一気に放たれる。

フェイトは、まだ漂っている『フォトンスフィア』を1点に集め、それを叩き付ける。

結果的に、それが致命的なミスとなった。

「……！？」

金色の球体は、一瞬で桃色の光の奔流に呑み込まれる。

魔力球を破棄してでも、回避に専念するべきだったのだ。

辛うじて防御魔法が間に合ったが、完全には防ぎ切れない。

フェイトの黒いバリアジャケットが、ボロボロになる。

（あの子だって、耐えたんだから……！）

桃色の光が収まり、金髪の少女は肩で息をしながら、さらに煌々と輝く桃色の光に顔を上げた。

「受けてみて、『デイバインバスター』のバリエーション……」

スターライト

ブレイカー

“Starlight Breaker”

ゾクッ

アルフの背筋に悪寒が走る。

あれはいけない。

フェイトの切り札の比ではない。

誰も試したことのない非殺傷設定の限界を、超えるかもしれない。

「くっ……！？」

フェイトも同じく嫌な感じがして、回避に移ろうとする。
しかし、動けない。

「バインド！？」

いつの間にか、両手両脚が拘束されていたのだ。

「フェイツ……！？」

アルフは思わず飛び出そうとして、手を掴まれた。

視線を向けると、自分を掴んでいる真っ白な手の主は、同じ色をした少女、ピュア。

目に涙を溜めて、じっとアルフを見詰める。

「目を逸らしちゃダメさ」

ピュアにだって判っている。

フェイトにはもう、余力がない。

あの馬鹿げた魔力による砲撃を受け切るだけの魔力も、体力も、残っていない。

この決闘で戦う者にルールはないが、立会人は手を出さずに見届けることこそがルールなのだ。

たとえ親しい者が負けそうだからといって、万が一が起きるかもしれないからといって、手を出してはいけない。

「これが、私の全力全開！」

白いバリアジャケットの少女は、高らかに叫び、掲げた杖を振り下ろす。

「スターライト・ブレイカアアアッ”！！！！”」

第8話、事件終結（前書き）

決闘の事後です。

第8話、事件終結

幻想郷アルハザードに到り、実際に蘇り、永遠の命を得た人間。それがピュア。

アルハザードは実在する。

ただし、アルハザードに到った者は、そこを『絶望の都』と呼ぶ。

蘇るとは、人間ではない、別の生命体になるということ。

ピュアは胸に埋め込まれたエネルギー結晶体が、心臓の代わりをしている。

そのエネルギー結晶体が宿主を守るために、瀕死の重傷を負うと強制転移して、肉体を修復する。

たとえ一瞬で蒸発したとしても、転生は起きて、肉体は修復される。

それが永遠の命の正体。

『ウィジャボード』は、ピュアが持つ『レアスキル』、『精神感応』を封じるためのもの。

それによって、敏感すぎる『精神感応』を封じている。

しかし、それは兵器にもなる。

個人を検索し接続すれば、あらゆる回避手段、防御手段、距離すら無視して、魔法を使うことができる。

なのはに使ったのは、ただの念話。

それが、プレシアに話した、ピュアの生い立ちだった。

アルフは思う。

あんな話が出てくるわけだ。
プレシアの目的はアリシアを蘇らせること。

しかし、その結果、最愛の娘を出口のない無限の地獄に突き落とすことになるかもしれない……
そんな話を聞けば、アルハザード渡航に二の足を踏むのは当然だった。

ピュアは、プレシアに別の方法を提示したことも話す。

『ジュエルシード』を肉体に埋め込んで蘇生するのではなく、可能な限り記憶を移植したクローン体に、『ジュエルシード』を使ってアリシアの半生を疑似体験させる。

これなら、万一次元震が起きたとしても、小規模に留まる。
暴走させるわけではないからだ。

「ピュア、君を今回の『ジュエルシード事件』の重要参考人として逮捕する」

「そんな！」

クロノの宣言を聞き、アルフは悲鳴のような声を上げた。

「この子はただ、偶然『時の庭園』に出てきただけで、『ジュエルシード』のことも、何も知らなかったんだよ！？」

「見過ごすには、彼女はこの事件に深く関わりすぎた」

「でも！」

「アルフさん」

ピュアは納得できないアルフに声をかける。

「わたしなら、全部説明できるさ」

『フェイトちゃんは、自分を悪者にしてプレシアさんを庇うかもしれないさ』

口と、念話で。

フェイトとアルフは、母親に命じられて『ジュエルシード』を集めていただけ。

それをどう使うのか、などという説明は、一切受けていなかった。だから、裁判にはなっても、無罪になる公算が高い。

それなのに、自分を犠牲にして母親を救う証言をしてしまうかもしれない。だから。

説明は、第三者の視点で事態を把握しながら手伝っていた、ピュアの口から行なわれるのが最適なのである。

そして。

今回の場合、プレシアが違法である人造魔導師の研究再会に踏み切った背景には、ピュアの提案があまりにも大きな割合を占めてしまっている。

人造魔導師の研究に積極的に関わるのは罪となる。

「そつちなんだ……」

ピュアはクロノの話を聞き、意外そうに言った。

てつきり、危険と知りながら、『ジュエルシード』について、あれこれ検証していたことを咎められるのかと。そう思っていたらしい。

数日後。

フェイト、アルフ、ピュアは、『アースラ』の懲罰室で鎖に繋がれ、次元空間にある本局まで護送される。

なのはと再会を誓い、希望を持つての門出となった。

フェイトとアルフは、クロノが説明したように、事実上無罪となるだろう。

処置も保護観察程度の話だ。

プレシアの行方を言わない点は、それほど重要視されなかった。プレシアの目的ははつきりとわかっているし、放置してもそこまで酷いことにはならないだろうからだ。

ピュアは。

裁判の前に2週間もかけて精密検査が行なわれ、裁判の後は態度次第で2ヶ月ほどで出所ということになる。

罪自体はそれほど重いものではなく、情状酌量の余地が認められ、再犯の可能性も低いことから、収容所で更生プログラムを受けるだけに留まる。

彼女には懲罰任務という道もあり、1週間ほどで釈放になることもできたが、任務を遂行するには病弱過ぎた。

それよりも問題だったのが、ピュアの肉体に融合した『ウィジャボード』だ。

これは、他人にも使用できる。使い方次第で、時空管理局が為す術も無く壊滅に至る、悪夢のような『ロストロギア』であると判明した。

危険度第一級指定。

そのため、『ウィジャボード』にリミッターをかけるためにデバイスを持たされ、使用には尉官以上の管理局員による承認が必要とされた。

「更生プログラムと言っても、今の魔導師としての一般的な常識や知識を一通り勉強するだけだから、難しく考えなくていい」

「ごめんね、私達に関わったばかりに……」

「うっん、今までフェイトちゃんみたいな優しい人、いなかったから。」

だから、わたしは後悔してないさ。フェイトちゃんに関われたことが、嬉しかったさ」

「ありがとう、ピュア」

「うん」

2人はしばしの別れを惜しむかのように抱き合った。

第8話、事件終結（後書き）

1期終了です。

転生もの、女オリ主、チートが入ってる、と確かに宣言しましたが、予想を裏切られた人が多いのではないのでしょうか。

さて、次のA'sですが。

ここまででキツイという人は、読まない方がいいです。
特に最終話は、ひろっさんが考える、『永遠の命』の何たるかをセリフに入れています。

でも、僕の中では暗さはまだまだなんですけどね。

第9話、始まりの襲撃事件（前書き）

1期終了から半年後。

コメディーパートですが、読み飛ばすと後悔することになります。

第9話、始まりの襲撃事件

思いの外、ピュアの裁判は早く終わった。

本人はある意味では違法な人体実験の被害者でもある。

そして、管理局の法律を知らなかったようでもあった。

その上で、本人は罪を認めて反省している。

ならば、クロノ・ハラウオン執務官の求刑通り、2ヶ月間の更生プログラムが妥当と考えられる。

そういう話で、特に議論することもなく、関わった全員が納得した。彼女の出身世界に関する配慮も大きかっただろう。

ピュアの出身世界、第16無人世界『シェオール』は、管理局システムが成立する以前の200年前、ミッドチルダ共和国の軍によって『ロストロギア』が使用され、無人世界に変わり果てていた。そこまでのことをした理由として、シェオール独自の魔法があまりにも高い水準で完成していたためとされているが、完膚なきまでに壊滅した現在では検証のしようもない。

ミッドチルダ共和国軍は、世界を滅ぼすような『ロストロギア』を多用する上層部に反撥し、クーデターを起こして管理局の前身となる組織となった。

つまり、時空管理局の祖先となった軍が、ピュアの故郷を滅ぼした事になる。

ピュアが最初に死んだ理由は戦争の流れ弾だそうだが、それは結局、ミッドチルダの侵略に対する防衛戦争だった可能性がある。

こと。ピュアに限っては、管理局は加害者側でもあるのだ。
そんな事情もあるため、ピュアが納得して罰を要求するのなら、文句を言うだけの理由を付けられないのである。
精々、『ウィジャボード』が悪用されないように、処置するだけであつた。

「えっ、もう？」

その話を聞いた時、フェイトは驚きの声を上げた。
可笑^{おか}しなもので、事実上無罪であるフェイトの裁判はまだ続いているのに、ピュアが釈放されるというのだ。

「しばらく保護観察が付く。とはいえ、完全に身寄りがないからな。これから先、どうなることか……」

「そうなんだ……」

「あんないい子の1人くらい、引き取れないってのかい！」

憤慨するアルフに、クロノは冷静に返す。

「逆だよ。里親の候補が殺到してる。それを捌くのに、担当部署が大騒ぎになってるんだ」

何しろ、失われた魔法技術を継承する唯一人の少女であり、その身体には失われた超文明世界『アルハザード』の技術を秘める。

さらには、その身体と切り離すことができなくなっている『ロストロギア』、『ウィジャボード』。

身内なら戦力として引つ張りやすいこともあって、保護者や後見人

に収まることができれば、それは大きなアドバンテージとなる。
最終的にはピュア本人が選ぶのだが、クロノ自身、この反応には閉口していた。

しかしフェイトは、迂闊に引き取ることになれば、ピュアの心に宿る、深い闇の一端を垣間見ることになるという予感がしていた。

アルハザードはそこに到った者からは『絶望の都』と呼ばれている。安易に力を求めれば、得られる力に見合わないほどの苦痛も、同時に持つ事になってしまう。

『お願い。わたしを殺して』

フェイトは、いつか聞いたピュアの寝言が頭から離れなかった。

ピュアはミッドチルダの海上隔離施設に収監されていたのだが、色々問題があった。

まず、海上隔離施設には魔力や能力を封印された状態で収監されるわけだが、ピュアの場合、設定を変更するために『ウィジャボード』を起動する必要があったのである。

普通に封印処理を行なえばいい並みの『レアスキル』とは違い、『アンチ・マギリング・フィールド AMF』やデバイスによるリミッターが通じないのだ。

それに関して、命じられた制限通り、尉官以上の管理局員の立会いを求めた。

次は、満足に走ることもできない体力の無さと、慌てれば必ず転ぶ、ゼロを下回る運動神経。

監視員の注意に驚いて転倒したり、引つ繰り返ったりするのは日常茶飯事。

無理をさせると翌日には熱を出す。

それに、視力の問題もあつた。

ピュアは蘇生した代償として、視力を失っているのだ。

今日が見えるのは、魔法による擬似視力で代用しているためである。

以上の事から、まるで病人を扱うかのようなデリケートさが要求された。

さらに、失われた魔法やアルハザード技術の一端を知るべく、毎日多くの人々が面会を求めてくる。

ピュアの体力の問題もあり、これには人数制限がかけられることになる。

彼女を引き取るうという動きのこともあり、記者を雇ってインタビュー形式で、問答が行なわれるという、異例の事態となった。

そんなこんなもあり、出所の際、隔離施設の局員からは口を揃えて

『二度と来るな』

と言われた。

それは奇しくも、地球の暦で12月2日。
フエイトの裁判判決の日でもあつた。

地球。

様子がおかしい。

それがユーノとフェイト、アルフが共通して感じたことだった。

ピュアは。

何も感じ取ることができていなかった。

それもそのはず、『ウィジャボード』による精神感応と魔力感知の封印を、解除していなかったからである。

この日は、決闘前後に一度だけ会ったのはに会うために地球に來ただけで、まさかいきなり戦闘が起これとは考えていなかったのだ。

「ピュア、ここで待ってて」

「う、うん」

はつきり言って、ピュアは戦場では足手纏いである。

効果が強力でも無闇に長い準備が必要になるシェオール式は、いい的にしかないのだ。

だから、張られている結界の外で待機、ということになった。

ヴィータから連絡を受けて、近くのビルの屋上で待機していたシャルは、結界の外に大きな魔力を持った魔導師がいることに気付いた。

危険を侵して結界内の魔導師を狙う必要は無い。

サーチャーを飛ばしてみれば、年端も行かない真っ白な少女。

これほどの魔力を持ちながら戦闘に参加していないところを見ると、戦闘力は低いのもかもしれない。

シグナムやザフィーラが時間を稼いでくれている今の内がチャンス

だ。

「ごめんね」

短い金髪の女性、シャルは空中から背後に回り込んで近付く。

「えっ、あっ、きやいんっ!?!」

突然現れた気配に驚いて、振り向きざまに足をもつれさせ、見事に後頭部を床に打ちつける真っ白な少女。

「きゅう……」

当たり所が悪かったのか、そのまま気絶してしまった。

「え、ええと……」

まさか、ここまで盛大に自爆するとはさすがに考えておらず、ばつの悪そうな顔をするシャル。

「と、とりあえず“蒐集”を……」

『リンカーコア』、魔力集積器官が摘出される。

「この子……!?!」

それを見て、シャルは驚きのあまり言葉を失った。

それは虹色の不鮮明な球体ではなく、青い球状の宝石だったのだ。それもそのはず、ピュアの体は兵器として改造を受けており、この宝石『シルマリル』から魔力の供給を受けて生きているのだから。

また、一度目の死と共に『リンカーコア』は失われており、今はこの宝石が『リンカーコア』の代わりを果たしていた。
もつとも、そんな事情はピュア自身、知らなかったことだったのだが。

ザムルング
“蒐集”

無慈悲に、剣十字の装飾が施されたハードカバー本が宣告した。
勝手に魔力の『蒐集』を始めてしまう。

「――ちよっ!？」

シャマルは慌てる。

この青い宝石が、この少女の命の源である気がしたから。
それを吸い取ってしまうという事は、この白髪に白い肌の少女の寿命を削るという事に他ならない。

「あ、ああ……!」

どんどん埋まっていくページ。

それが20ページを超えたあたりで、宝石が強い光を放ち始める。

「こ、これ以上は……」

シャマルは焦るが、『闇の書』は言う事を聞いてくれない。
このままではこの、真っ白な少女を殺してしまう。

だが、忘れてはいけない。

ピュアはアルハザードの技術で、兵器として蘇ったのである。

その心臓は宝石型のエネルギー結晶体で、『ロストロギア』。
アルハザード製の『ロストロギア』は、甘くはない。

次第におかしな現象が起き始める。

真っ黒なページが、不規則に混じってきたのだ。

「えっ!？」

そして、そこで『闇の書』は動きを止めた。

コントロールが戻らないまま、シャルの目の前で本は閉じられる。
ブツリ、と何かを強制的に切断するように。

本は屋上の床に落ちた。

『シャル、なんだ、今の魔力は!？』

『大丈夫か!シャル!？』

シグナムとヴィータが念話を送ってきた。

『何が起こったのか、よく解っていないの!私は無事だけど……』

『そうか……こちらもまずい。結界が壊されそうだ、一端退くぞ!』

『仕方ないな』

『わかった!』

それぞれ返事があり、シャルも敵の目を晦ませての逃走の準備に入る。

桃色の光の奔流が天を衝いたのは、その時だった。

第10話、使い魔選定（前書き）

まだコメディパートです。

第10話、使い魔選定

「一体、何があったんだ？」

「それがその、私にも何が起こったのか解らないんです……」

シヤマルは一応、真つ白な少女の『リンカーコア』を摘出した所から話し始める。

本人の名誉のためにも、声をかけただけで盛大に自爆したのは伏せておくべきだろう。

『リンカーコア』を摘出したつもりが、青い宝石が出てきたのだ。そして、戸惑っている『闇の書』が勝手に『蒐集』を始めてしまったのである。

頃合を見計らって中断するつもりだったが、今度は『闇の書』がコントロールを受け付けない。

焦って色々と強制停止させようとするも効果はなし。

そのうちに、『闇の書』の何ページかが焼け焦げたように黒く塗り潰され、弾かれるように機能を停止して屋上の床に落下。

それ以降、『闇の書』がうんともすんとも言わなくなってしまったのだ。

本は今も堅く閉ざされ、開かなくなってしまうている。

「これは……参ったな、『蒐集』の機能も使えそうにない」

「じゃあ、はやての足はどうなるんだ？このまま浸蝕が進んで、死んでしまうのか！？」

「落ちて着けヴィータ。逆に、これが原因で浸蝕が止まるかもしれん」
ザフィーラが宥める。

今までの主と違い、ヴィータは精神年齢が近いということもあって、今の主とは特に仲が良い。

「希望的観測に過ぎないが、いずれにせよ『闇の書』がこれでは『蒐集』を続けることは不可能だ」

シグナムが言う。

主に死んでほしくないのは、皆も同じである。

「原因はわからんが、直るまで待つしかあるまい」

時空管理局の本局で、『蒐集』を受けたピュアの精密検査と、状況説明が行なわれた。

最近地球で、『ジュエルシード』事件の事後処理に当たっていた管理局員が、何者かに襲撃される事件が多発しているらしい。

大抵は気絶させられて、『リンカーコア』に蓄積されている魔力を根こそぎ奪われるだけで、命に関わるような大きな怪我を負ったという報告はない。

しかし、魔法が存在しない世界、管理外世界において魔導師が暴れているという話を、放置することはできない。

今回はまず地球人であるツインテールの少女、高町なのはが封時結界の起動を察知して家から飛び出したところ、赤髪に赤いバリアジ

ヤケツトの少女に襲撃されたという。

それから戦いになったが、赤髪の少女がかなり強く、撃墜されてしまった。

そこへ、異変を察知したフェイト達が駆けつけたという次第だ。

それからさらに桃色の髪の女性剣士が駆けつけ、青い狼が参戦した。

フェイト達がそちらに集中している間に、少し離れた位置で待機していたピュアが4人目に襲撃され、『蒐集』されたという事なのだが。

最初、話を聞いたフェイト達が蒼褪めたのを、なのははよく覚えていた。

ピュアの身体はアルハザード製のエネルギー結晶体によって維持されており、そのエネルギーが尽きることは彼女の死と同義なのだ。

ただし、ピュアの身体に使われているアルハザード技術を舐めてはいけない。

彼女の肉体を維持しているエネルギー封入体は『シルマリル』と言い、これ1つで本局で使用されているエネルギーを20年は賄い切れるほどの代物である。

そのエネルギーを魔力として引き出すには、『リンカーコア』と同じように肉体への負担がかかるようだが、これの魔力が尽きることはまずないと言っていい。

もちろん、『シルマリル』は危険度第一級指定の『ロストログリア』である。

この辺り、『自分が得た不老不死は無限地獄』と表現したピュアの言葉は的を射ていた。

もっとも、『シルマリル』への直接的な干渉が『転生』を発動させない保障は、どこにも無かったのだが。

ともあれ、ピュアは後頭部に大きなたんこぶを作っただけの軽傷に留まった。

「よかったあ」

説明を聞いて、フェイトはほっと胸を撫で下ろす。

本来、異常が無いことの方が異常なのだが、友人の無事には換えられない。

「なのはの方も、もう身体に問題はない。レイジングハートの修理に少し時間がかかりそうなのが問題なんだが……」

クロノは、修理の間にもう一度なのはが狙われる可能性があることを示唆する。

なのはのレイジングハート、フェイトのバルディッシュは、昨日の戦いによって大きく破損していた。

自己修復は難しく、現在は本局の整備施設で修理を行なっている。
フェイトもなのはも、高速戦闘は愛器である人格型デバイスインテリジェントに頼っている部分が大きいため、今同等以上の敵に襲撃されると、対応が難しくなってしまう。

その間、約1週間を何とかしなければならぬ。

「まあ、なのはにはユーノ、フェイトにはアルフがついてる。

今回の任務には武装隊を借りられることになったから、今度は先手を打てるだろう」

『問題は……』クロノが視線を向ける。

髪の毛が真っ白で、肌も真っ白、瞳も真っ白な少女に。

ピュアは気まずそうに視線を泳がせた。

「フェイトは知っているかもしれないが、ピュアの運動神経はゼロなんてものじゃない。それ以下だ」

「そうなの？」

「う、うん……」

なのはが不思議そうに聞くとフェイトも苦笑せざるを得ない。

部屋の角、家具に足の小指をぶつけるのは日常茶飯事。

最初の内は無理をして広域探索魔法を使って、ほぼ1日中寝込んでいた。

無理をしていた事に気付いたのは3回目くらいで、それ以降も言っても聞かずに無理を続けて寝込んでいた。

だから、家の中でも1人しておくのが心配なほどの運動音痴だと気付いたのは、拠点にしていた遠見市のマンションを引き払う時。

痛い時、苦しくて辛い時も、それをおくびにも出さずに頑張つてしまふ。

だから色々と放っておけないのだ。

一方、クロノの方も、ミッドチルダの海上隔離施設に収監されていた時の話を聞いていた。

こちらは管理局内でもかなり有名だ。

余所見をしていてぶつかったりすると、啞然とするほど吹っ飛び、気の毒になるほど転げ回って、気絶する。

軽犯罪者を収監する施設だけあって、時にはぶつかったことをきっかけに絡まれたりすることもある場所だが、ピュアに限っては一度もそんなことが起こらなかったそうだ。

「あ、あはは……」

起こったであろう惨状を想像し、運動音痴で通っているなのも、乾いた笑いしか出てこない。

「というわけだ。異例のことではあるんだが、ピュアには使い魔と契約してもらう」

クロノは言う。

「まあ、それが妥当だろうね」

ユーノも苦笑い。

自分でまともに反応もできないなら、自分ではない誰かに守ってもらうしかない。

幸い、ピュアの魔力は、ろくに訓練もしていなかった状態でAAAクラスだったのはに匹敵する。

意図して『シルマリル』の力を引き出すことができれば、それ以上の出力を発揮できる可能性も充分にあった。

さらに、前準備に時間がかかっても効果は強力なシエオール式の魔法のことを考えれば、最終的なランクは条件付でSを上回る可能性がある。

使い魔のランクは大体、契約主よりも1つ2つ落ちるから、理屈で考えるだけでもAAは堅い。

そして、事件発生の中心地である海鳴市に管理局員の捜査拠点アイスラクルを構えることが決定しており、時間は充分にある。

『闇の書』が関わっている疑いがあつたからだ。

『アースラ』には『闇の書』事件に赴く部隊の慣例として、次元破砕砲『アルカンシエル』が搭載されることになっていた。

「あ、これ可愛い」

「これも」

「え、ええっと……」

ピュア用に貸し出された通信端末は今、フェイトとなのはに占領されていた。

使い魔選びについて、慣れていないピュアがフェイトに相談したところ、一緒にいたなのはが食いついてきたのである。

「遊びじゃないんだぞ。今回は即戦力も必要になる」

クロノは語る。

ピュアのマイナスな運動神経を打ち消して余りある戦闘能力。

それがなければ、今後彼女は自分の身を守ること難くなる。

彼女の豊富な魔力を欲しがっているのは、何も『闇の書』の守護騎士達だけではないのだ。

クロノは今回の騒動の元について、確信めいた予感を持っていた。

第11話、魔女の使い魔はトラ猫（前書き）

まだまだコメディパートです。

モンハンネタとか入ってますが、他に適当なのを思いつかなかった
ので。

ラージャンが子猫になる理由は設定してません。

第11話、魔女の使い魔はトラ猫

「契約を交わした以上はまあ、心配ないと思うけど、一応説明しておくね」

管理局員の制服姿の短い茶髪少女、エイミィがピュアに説明する。

「危険指定動物『ラージャン』。成体はSランクオーバーの強さを誇る、非常に狂暴な動物よ」

偶然管理局員に発見された子供で、保護したものの狂暴すぎて生態調査もままならないような動物をこのまま育てることもできず、かといって野に放つには危険なため、始末に困っていたという。

現地では『牙獣種』と呼ばれる種類で、本来は猿かゴリラに近い姿をしているが、変身魔法で小型化しているときは、なぜかトラ模様の子猫になる。

ちなみに、現地『シュレイド』の『モンスターハンター』と呼ばれる職種の人間は、非魔導師ながら『ラージャン』をはじめとした凶悪生物を討伐するという、破格の戦闘能力を誇るそうだ。

何名か、自然保護隊に引き抜かれており、その圧倒的な戦闘力で日夜、密猟者と戦っているとか。

中には武装した次元航行艦を撃墜する猛者もいるらしい。

「にゃ」

「きゃー、可愛いー!」

エイミィとなのはが頬を緩めて黄色い声を上げた。

「名前はもうつけたの？」

フェイトが聞くと、ピュアは頷く。

「うん、クリアっていうさ」

すると、膝の上にちょこんと座っていた子猫は、円らな瞳でピュアを見上げる。

頭を撫でてやると、気持ち良さそうに目を閉じた。

「成体モードの時の負担はどうだ？」

クロノが聞いた。

「大丈夫。１時間くらいなら平気さ」

ピュアは笑顔で答える。

クロノは不覚にも一瞬、その真っ白い姿に見蕩れた。

使い魔というのは、高性能ならば、その分契約主の魔力負担が大きくなる。

強い使い魔を持つのは魔導師としてのステータスにもなるが、だからといって分不相応な使い魔を持つと、負担に耐え切れずに自滅してしまう危険もあるのだ。

ちなみにクリアは、A A Aランク相当の、かなり高性能な使い魔である。

元が凶悪な猛獣なだけあって、ピュアを守るための即戦力として充分に期待できた。

「これからピュアの守りは任せ……」

ぱりっ

頭を撫でようとしたクロノの手が引っ搔かれた。
クリアに。

「にゃあ」

嘲笑するようなひと鳴き。

（抑えろ、ただ仲間と思われていないだけだ。ずっと黒い服だったのがいけないのかもしれないし……）

必死に自制するクロノだった。

「それにしても、「にゃあ」だけなんだね……」

「にゃーっん」

「えっと、そうじゃなくって……」

どうやらフェイトは、使い魔なのにクリアが言葉を話さないことに疑問を持っているようだ。

観察していると、人間の言葉を理解しているらしいことはなんとなく解るのだが。

「でも、なんとなく、何を言いたいのかわかるの」

なのはが言うと、クリアは小首をかしげる。

「ホント？だつて」

「あ、今のは私も解ったかな」

言葉はなくとも、意思は通じるらしい。

「にゃあん」

「お腹空いたつて言ってるさ」

「い、今のは解らなかったよう……」

なのはの読心術も、飼^{シム}い主には敵わないようだ。

フェイトとピュアは、地球の聖祥小学校、なのはと同じ小学校に通わないか、というお誘いがあつた。

戸籍の方は、管理局の方で何とかできるらしい。

フェイトは了承したが、ピュアは返事を渋っている。

なぜならば、正確なところは解っていないが、少なくとも2000年以上前の人間であるし、その身は兵器に改造されることで二度目の生を受けている。

クローンであるフェイトと違い、容姿から何から、あまりにも一般人とかけ離れすぎているのだ。

ピュアのような存在^{イレギュラー}を受け入れる土壌が、地球には無いのではないかと恐れているのである。

それと、護衛であるクリアを学校に連れて行くわけにはいかない。という理由もあつて、最低でも魔導師襲撃事件が解決するまでは、学校に通うのが難しいことを話す。

クリアは元が狂暴な猛獣とはいえ、子供の時点で使い魔にしたため、

まだまだ思考も子供なのだ。

インプリンティング

使い魔契約によってピュアを親と刷り込みされているため、どうしても親が恋しくて仕方ない。

ピュアの方も心配で放っておけなかった。

幸い、容姿の問題については、先天性色素欠乏症等の病気という事にすることで解決した。

多少、後ろ指差されるかもしれないが、理由を付けられているのと同じでないので、反応が違はずだ。

クリアの問題は残念ながらどうにもならない。

時間をかけて成長させていくしかない。

幸いというか、使い魔にすると子供といえどもかなり成長が早くなるため、1ヶ月以上はかからないだろうと、リンディは説明する。

とにかくそれが解決すれば、ピュアもなのは達と一緒に小学校に通うということになった。

「じゃあ、始めるさ」

被害が出ないようにユーノが封時結界を展開し、クリアに戦闘の基本を教えるべく、オレンジ色の狼姿でアルフが息巻く。

「どーんとかかってきな！」

『非殺傷設定のみなら魔法アリ、相手が負けを認めるか、気絶するまで』

管理局が臨時の指令部を置いている部屋から、エイミイが浜辺の2匹にルールを説明した。

『準備OK?』

「じゃあ」

「いつでもいいよ!」

ちなみにここは海鳴市、臨海公園近くにある海鳴ビーチである。今は冬であるため、人影はなく閑散としていた。

なのは、フェイトは学校、クロノとリンディは仕事である。

この場にいるのはピユアと、封時結界を貼っているユーノと、対峙しているクリアとアルフのみ。

『レディ、ファイト!』

エイミイの声と共にクリアが変身する。

もちろん、そんな隙を逃すアルフではない。

「今から変身なんて遅いんだよ!」

攻撃を仕掛けるが、彼女の本能がけたたましい警鐘アラートを鳴り響かせる。そして自分に覆い被さるような、頭の横に双角を生やした巨大な黒いゴリラの姿を目撃した。

そういえば、クリアは『ラージャン』とかいう、凶悪生物の子供だったか。

ということとは。

これは『ラージャン』の成体という事になる。

精々虎程度のものと高を括っていたが、さらにふた回りは大きい。大きな牛ほどもある。

おそらく『変身』で驚かせて飛び掛かり、不意打ちしようとしたのだろう。

しかし、アルフの突進が予想以上に低く、速かったため、クリアは狼を飛び越してしまっていた。

『あれ？』と首を巡らせる『猛獣フォーム』のクリア。

アルフはそこへ誘導弾を撃ち込んだ。

初見でかなりビビッたのは認めるが、作戦が外れれば後は力と力、技術と技術のぶつかり合いである。

クリアは誘導弾をもろに食らい、ごろんと転がる。

しかしそれほどダメージは無いのか、すぐに起き上がって反撃してきた。

電撃の混じった魔力弾。

一応非殺傷設定のはずだが、浜辺に直径5メートルほどのクレーターを作ってしまった。

アルフはもちろん、回避に成功している。

スピード重視の魔導師フェイトの使い魔は伊達ではない。

しばらく、電撃弾と誘導弾の応酬を繰り返していたアルフだが、早速クリアの弱点に気付いた。

攻撃はどれも強力だが、冷静に観察していれば前準備を読んで安全地帯を見切ることができるのだ。

それと、ピュア自身が飛行魔法を知らない影響か、飛ぶことが出来ない。

対空攻撃は、モーションの大きい直射魔法しかないのである。

先日襲撃してきた魔導師達が空戦タイプだったことを考えると、これは致命的と言えた。

「ほらほら、そんな大振りの攻撃だと、空に逃げられるよ！」

「ウウウー！」

空に逃げるアルフの挑発にクリアは悔しそうに唸る。

「クリアー、がんばるさー！」

そのとき、ピュアが声援を送った。

「うがーっ！」

気合を入れるためか、2本の後肢で立ち上がり、クリアは空に向けて思い切り吼えた。

すると不思議な現象が起きる。

今まで黒かったクリアの毛皮に、金色の模様ができたのだ。

ピュアが習得している、シェオール式の身体強化魔法であるということ、後で知った。

踏み切りで爆発的に舞い上がった砂から、身体を丸めたクリアが縦回転しながら突進してくる。

危ないと気付いたときには、すでに手遅れだった。

辛うじて回避しようとしたが、腰に掠っただけで凄まじい衝撃が走

る。

次に感覚が戻った時は海面に叩き付けられていた。

「あのね、ピュア。戦い方の前に、手加減を教えるべきだと、あたしは思っただよ」

黒く大きな猛獣の小脇に抱えられたオレンジ色の狼は、猛獣の主に提案した。

「そうだね、僕もそう思うよ」

ユーノも同意する。

「ごめんなさい、わたしも途中で思ったさ」

ピュアも頷いた。

第11話、魔女の使い魔はトラ猫（後書き）

モンハンやった人は知ってると思いますが、ラージャンは普通に象くらい大きさがありません。

この話でも同じで、クリアでまだ小さい方なんです。

第12話、遭遇（前書き）

シリアスかな？ コメディかな？ って感じですが、大半が説明です。

第12話、遭遇

先天性色素欠乏症で、ほとんど目が見えない弱視。

生まれ付き病弱で、赤ん坊の頃に大きな病気を患って、視力が低下してしまっている。

そのためにメガネをかけている。

患っていた病気が快復し、リハビリも済んだので、学校に通わせた
い。

小学校には、そう説明される予定だった。

だから、その通りのことを、目の前の、車椅子の少女はやてにも話す。

同時に念話では、長い桃色の髪の女性シグナムに、自分の身体について管理局が把握している程度のことを話した。

自分は一度死に、アルハザードで兵器として生まれ変わったこと。

そのために、肉体を維持するのに、あの青い宝石『シルマリル』が埋め込まれたこと。

『シルマリル』は世界1つを破壊可能なエネルギーを封入された、アルハザード製の『ロストロギア』であるらしいこと。

自分の『リンカーコア』は一度死んだ時に失われており、今はその『シルマリル』が代わりを果たしていることなど。

ピュアは、なのはの親友として知り合ったすずかに、この図書館のことを教えてもらっていた。

だから、クリアの模擬戦で負傷したアルフが回復するまで、この図書館にクリアと来ていたのだ。

そこではったり、桃色の髪の女性、シグナムに車椅子を押されるはやてに出会ったのである。

もちろん、双方予想外の出来事だった。

「ふーっ！」

肩から提げられたカバンの中から、『子猫フォーム』のクリアがシグナムを威嚇する。

「クリア、落ち着くさ」

ピュアはなだめた。

この図書館で『猛獣フォーム』になって戦うという事になると、アルフを一発でノックアウトした破壊力を考えれば、死人が出かねない。

『その子は使い魔か？』

シグナムは聞く。

『一昨日、契約したばかりさ。だから、まだ目が離せなくて……』
『そうか……』

念話でやりとりして、そこでシグナムは気付く。

話題が魔法関連なので念話を使っているが、これでは普通に友人と世間話をしているようではないか、と。
そう考えると、思わず笑みが零れた。

「これからよろしゅうな、ピュアちゃん」

「うん、こちらこそ、はやてちゃん」

この日は、ピュアとはやてが友達になる約束を交わして、双方図書

館を後にする。

『シャマル、聞こえていたか？眼鏡をかけてはいたが、3日前にお前が『蒐集』した子は元気だったぞ』

『い、今のがあの子だったんですか！？』

『間違いない。お前の話とも一致するし、念話も通じた』

シグナムは未だに開かない『闇の書』のために、自宅で待機になっているザフィーラやシャマルに、ピュアの話の中継していた。

管理局が来ていることは間違いないだろう。

使い魔の件も、あの真っ白な少女を守るために管理局が手配したに違いない。

ただ、一度『蒐集』した対象は二度収集できないため、つけられた護衛にあまり大きな意味は無かったが。

ちなみにヴィータはゲートボール場である。

大会に向けて練習しているそうだ。

仮司令部に帰る途中、ピュアは頭の中で情報を整理する。

あの桃色の髪の女性、シグナムは、数日前に見せてもらった映像に映っていた。

古代ベルカの剣士。

フェイトの話では、かなり強いという話だ。

そんな女性が、親戚という少女が乗った車椅子を押していた。八神はやたと名乗った少女が、『闇の書』の主なのだろうか。あの、屈託のない笑顔で自分を見つめていた少女が。

もしもそうなら。

あのシグナムという女性に『蒐集』させている？
本当に？

そんな事をさせているのなら、それが罪と知っているのならば、呑気に図書館などに来るだろうか。

管理局が出てきていることはすでに知れているはずだ。

少しでも捕まるリスクを減らそうとするものではないのか。

いくらシグナムが強かろうとも、数で攻められれば、はやてに害が及ぶ可能性もある。

まあこれは、はやてが『闇の書』の主と仮定した場合の話だが。

幾つか矛盾が出てきている以上、この予想は外れていると考えていい。

少なくとも『蒐集』のことを、はやては知らないだろう。

（そういえば……）

ピュアははやての車椅子の原因を聞いていない。

面と向かって聞くことでもなかったからだが。

先天性の障害なら、よほど上手く育てられない限りは話し方に出る。しかしあの少女にそんな雰囲気は無かった。

ということは、良い親がいたか、最近の、事故による怪我などが原因と考えられる。

足の骨でも折ったのだろうか。

車椅子という事になると、両脚か？

考えても仕方がない。

そう思い、ピユアが管理局の仮司令部に帰る。

普段着のクロノが難しい顔をしていた。

「どうしたさ？」

「ああ、母さんの血糖値が心配なんだ。何か良い方法はないものか……」

真剣な顔をして何を考えているのかと思えば、と、ピユアは内心呆れた。

「そういえば、『闇の書』ってどんなものさ？」

真つ白な少女は聞く。

クロノの悩みはスルーすることにした。

「ああ、大体10年くらいの周期で発生している、大事件の原因だよ」

さすがは優秀な執務官なだけあり、クロノはすぐに切り替えてピユアにそれを説明する。

『闇の書』とは。

魔導師の『リンカーコア』を『蒐集』して完成し、主に強大な力をもたらす魔導書型のデバイスである。

しかし、完成すると暴走し、周囲に大きな被害を出す。

そのたびに管理局は次元破碎砲『アルカンシエル』によって、主ごと吹き飛ばしてきた。

ところが無限再生機能と転生機能があり、また外部から操作しようとする主を吸収して転生してしまうため、事実上破壊不能とされている。

どうも原因は解らないのだが、融合事故が起きているらしい。

『闇の書』には『ヴォルケンリッター』と呼ばれる、4人の守護騎士システムが存在し、その4人が魔導師の『リンカーコア』を『蒐集』する役目も果たしている。

確証はないが、今回なのはを襲撃したベルカの騎士が、その守護騎士ではないかとクロノは考えていた。

ついでに言えば、ここ数日魔導師の襲撃事件がぱたりと止んでいる。ピュアが『蒐集』された日を境にだ。

だから、もしかすると『闇の書』になんらかの異常が発生しているのかもしれない、とクロノは語る。

「それって、もしかしてアルハザード製かもしれないさ」

「なんだって？」

ピュアが言い出した言葉にクロノは食いつく。

使っている魔法は古代ベルカ式なのに、アルハザード製かもしれないときた。

アルハザードの技術には落とし穴しかない。

それをよく知っているからこそ、ピュアは言った。

「わたしの場合、お母さんの望みはわたしを生き返らせることだったさ。

でも、力を得るっていうだけの話なら、わたしはある意味成功例さ」

「ピュア……」

力の断片を埋め込まれ、制御できないなりに『レアスキル』が発現した。

さらにどこかわからないが転生して復活するため、いつかは戻ってくるかもしれない。

確かに、不死身で強い兵士を開発するための過程として見るなら、ピュアは成功例だ。

「でも、デバイスっていう形で、ノーリスクな力を求めて、ただで済むはずがないさ」

『闇の書』は、持ち主がノーリスクで力を得ようとした結果の、なれの果てかもしれない。

主を呑み込んで無限に再生し、暴れ、主を殺して転生する。

「確かに……そうだとすれば、暴走するのは製作者の意図を超えた現象という事だな」

「もしかして守護騎士さん達って、暴走した後の記憶、ないさ？」

「それは解らないが……そうか、主は『闇の書』が完成した後に、それが暴走することを知らない可能性もある」

「『蒐集』してるのも、何か理由があるかもしれないさ」

「それを鵜呑みにするわけにはいかないが、確かに想定しておくべきではあるな」

クロノは頷いた。

ただし、納得はできない。

父が死ぬ原因となった『闇の書』を、仕方なかったで許せるわけもなかった。

ただ、思っただ。

それは結局、作った者の罪ではないか、と。

娘を蘇らせたかった母親が娘を兵器に改造してしまったのは罪だが、その娘に罪はないはずである。

どうも、ピュアが情状酌量の余地を求めると、それを否定できないのだ。

第13話、守護騎士の投降（前書き）

コメディパート終了のお知らせ。

第13話、守護騎士の投降

はやてが倒れた。

かかりつけの医者によると、いよいよ危なくなってきたという。

1ヶ月ほど前。

原因不明の麻痺は下半身から進行し続け、このままでは内臓にまで達すると告げられた。

そうなれば、命を繋ぐのは難しいとも。

だから、『蒐集』を始めた。

騎士達は『闇の書』からの浸蝕が原因と考えていたから。

主が否と言っても、騎士達は『蒐集』を行なつて、『闇の書』を完成させるしかなかった。

はじめて、温かい生活というのを、はやては教えてくれたから。

他の主はどうでも、はじめて、自分たちの意思で、失いたくないと思つたから。

『闇の書』は閉ざされたまま。

騎士達は何が起こっているのか知る術がなく、完成させることもできない。

それなのに、はやての麻痺は進行していく。

「なんでだよ……なんで『蒐集』できねえんだよ!」

ヴィータは嘆く。

「ごめんなさい、私があるとき、ピュアちゃんを『蒐集』しちゃつたから……」

シャルが自分を責める。

「……………」

ザフィーラは黙るしかない。

余裕がないのは皆同じだった。

『闇の書』がともに起動していたときは、まだ『蒐集』して完成させるという希望に縋ることもできたが。

守護騎士には影響を及ぼさないまま、『闇の書』は沈黙したまま。何度起動しようとしても、ページを確認しようとしても。

『闇の書』は開かない。

魔力を注いでも、『蒐集』しようとしても、力づくで開こうとしても。

固く閉じたまま。

自分たちのせいで死んでいく命を見るたび、何度思ったことだろうか。

誰か、書を永久に破壊しつくしてくれないだろうか、と。自分達ごとで構わなかった。

なぜ今。

最早、希望はない。

散々、『呪われた魔導書』と言われてきたそれが沈黙する姿など、見た事がない。

「投降しよう」

シグナムは静かに言った。

「投降って……管理局にかよ！？」

「他に手は無い」

「冗談じゃねえぞ！はやての身体を玩具にされて、結局転生機能が起動しておしまいじゃねえか！」

ヴィータがシグナムの胸倉を掴んだ。

「黙れ！私だって……！」

シグナムも掴み返す。

「私だって、出来るなら、私たちで手を打って……」

端正な顔を歪め、目に涙を浮かべ、消え入りそうな、嗚咽交じりの言葉が紡がれる。

そのまま、泣き崩れた。

はじめて、烈火の将は人前で弱みを見せた。
それが意味するのは、絶望。

「……くっそおおおおっ！！！」

「……そうか……」

白髪の初老男性ギル・グレアムは念話での報告を聞き、ただそれだけつばやいた。

『蒐集』ができなくなり、主を救う希望を失った守護騎士達の決断は、時空管理局の技術に頼ることだった。

しかし、それは結局、『闇の書』が暴走する時期を遅くするだけだ。そしてまた、悲劇は起こるのだろう。

『蒐集』させて、完成した瞬間を狙った凍結封印は、最早不可能だろう。

異常は起きてしまった。

撒いた水は器に還せない。

グレアムとしても、これは予想外の結末だった。

ただ1人の少女を除いて、『闇の書』をどうにかする手段は無かった。

その少女の力を以ってしても、一体どこまで通じるのか。

失われてしまった世界の魔法技術。

幻想郷、『絶望の都』アルハザード。

幾ら技術が高かろうとも、できないことはできない。ただ。

彼女が立つのなら、協力しよう。

そうとだけ、思った。

実は、シグナムはシェオール式の魔法というのを聞いたことがあった。

戦闘には向かない、低速高威力の魔法。

ゆえにベルカ魔法に席卷され、かなり衰退していたらしい。

話に聞くと、実際に目で見るのとは違う。

『百聞は一見に如かず』と言った地球の古人は、なんと偉大なことわざを遺したのか。

ベルカ式でもミッド式でもない魔法陣など、はじめて見た。

「キレテナイ 回復結界展開」

ただ、主はやてに付き添っていて毎回思うのだが、この詠唱は気が抜ける。

複雑な魔法陣の展開に2分。

詠唱完了に3分。

実に5分。

術者が無防備になってしまうのが『シェオール式』。

効果は目を疑うほどのもの。

たった30分の展開で、若干だが『闇の書』の浸蝕を押し返すことができるのだ。

とりあえずは、効果が確認されたシェオール式の回復魔法を何度もかけることで、『闇の書』の浸蝕を抑えることになった。

ただし。

ピュアの体力の関係上、1日5回が限度と、ミッドチルダにある大病院の主治医が制限をかける。

彼女の体力が無さ過ぎるという事もあるが、シェオール式は他と違い、身体にかける負担も大きいのだ。

つくづく、戦闘には向かない魔法体系である。

しかし、いつまでもは続かない。

それはシグナムも理解している。

それで浸蝕を押し返したとしても、根本的な解決になっていないからだ。

こうやって時間を稼いでいるうちに、時空管理局の『無限書庫』で『闇の書』について調べる手筈になっていた。

そちらへはシャマルが手伝いに行っている。

管理局側からはフェイトの保護監察官である、グラム提督の使い魔、リーゼ姉妹が資料の搜索を行なう。

それと、スクライアー族の少年ユーノも参加していた。

ヴィータとザフィーラは、今はピュアの使い魔クリアの相手をしている。

なんでも、攻撃力が高すぎるため、力を制限したり手加減を行なうことを教えるのだそうだ。

一筋縄ではいかないと、ヴィータがばやいていた。

明日はシグナムと交代することになっている。

なのはとフェイトは小学校に行っている。

土日の休みには遊びに来ると言っていた。

第13話、守護騎士の投降（後書き）

A's 開始直後の『闇の書』機能停止が、こんな所に繋がります。
テンプレハッピーエンドフラグ？
誰かそんなこと言いましたか？

第14話、接続、原因究明（前書き）

大半が説明です。

第14話、接続、原因究明

頭に2本の角が生えた、金色に輝く縞模様のゴリラ。大きさは牛か熊ほど。

自らの肉体を巨大な砲弾に見立て、回転しながら跳躍、突進してくる。

「速い……！」

シグナムは呻いた。

以前、一度相手をしたフェイトの使い魔アルフが、掠っただけで吹き飛ばされたという、高く跳躍する突進。彼女は何とか回避に成功した。

「確かに、これを初見で避け切るのは厳しいな」

ついでに、手加減を教えなければ、そのうち死人が出かねないというのも理解した。

着地点には直径5メートルほどのクレーターができている。

もちろん、突進に非殺傷もない。

生半可な魔導師では、防御ごと押し潰されるだろう。

盾の守護獣ザフィーラなら、魔法が間に合えば防御も可能なようだ。シグナムも、カートリッジを駆使して防御に専念すれば、なんとか重量で押し込められる程度で済む。

信じられないパワーだ。

フェイトの使い魔アルフが言っていた、技が大振りすぎて、ほとんどを前兆で回避できるというのは、致命的な欠点と言えた。

しかし逆に、その御蔭で辛うじて戦えている状態なのかもしれない。
シュラゲンフォーム
連結刃形態の愛剣レヴァンティンが突進に巻き込まれて持って行かれてから、シグナムはそう思った。

戦って倒せと言われるなら、何とか倒せなくはない。

ただその場合、殺すことになるだろうという予感がある。

ヴィータはこの使い魔に対して、思わず切り札の『ギガントシュラーク』を使ったそうだ。

そんな相手に手加減を教えようというのである。

やはり、一筋縄ではいかない。

人間形態への変身を教えた方が早いかもしれない。

それにしても。

この『猛獣フォーム』はかなり燃費が悪いそうだが、ただでさえ強力な回復魔法を使い続けているあの少女への負担は大丈夫だろうか。それと、この猛獣が手の平に乗るほどの大きさになる、というのは、実際見ても未だに信じられない。

基本的に、移動には管理局員の監視がつく。

そんな中で今まで魔導師を襲撃してきた分の罪を償うため、懲罰任務に従事する。

とはいえ、まだ裁判も始まっていない。

守護騎士達4人は時空管理局の建物内部で軟禁生活をしながら、それぞれできる仕事についていた。

『闇の書』の主には何も報せずに『蒐集』を行なっていたため、八神はやてに罪が及ぶことはないそうだ。

時空管理局は、主というだけで罪を押し付けるほど狂った組織ではない。

もちろん、それだけでは過去に『闇の書』事件で家族を亡くした遺族が納得しないかもしれないが、それを説得するのはクロノやリンディの仕事である。

ピュアが彼らを救おうとしていることは、当然ながら話題に上った。研究者は純粹にシェオール技術が披露されるのを期待する。

『闇の書』事件の遺族からは、反撥の声が弱いながらも出ている。今まで散々悪事を働いてきた『闇の書』を救う必要はない、と。

ただ、ピュアの境遇を考えると、彼女を止めることもできなかったアルハザード超技術の落とし穴に突き落とされた少女。

管理局の技術でも如何ともしがたく、これまでも、これから、永遠の時を苦しみ続ける。

守護騎士達が管理局に投降してから、4日が過ぎた。
地球の西暦で12月11日。

『闇の書』の本来の機能が判明した。

正式名称『夜天の魔導書』。

元は様々な魔導師達の技を後世に遺すための、資料に近い役割を持った魔導書だった。

しかし、何代目かの主が改変を行い、『蒐集』によって魔力を吸収するように仕立て、さらには防衛プログラムに手を加え、自爆するかのように暴走するようにしてしまった。それを止めようとした管制人格が、勝手に干渉できないようにも変えられており、それが昨今の『闇の書』事件に繋がったと考えられる。

『闇の書』の防衛プログラムから流れ込んだバグが蓄積されても、修復することができずに放置されたために、様々な機能障害を抱えることになったのだらう。

おそらく、『蒐集』を行なわなければ主を浸蝕するといった機能も、バグが蓄積された結果と推測される。

「ただの資料本がなんともまあ……」

猫が素体の使い魔、リーゼロッテがつぶやく。

「アルハザード製かもしれないっていうピュアの予想は外れていたが、『蒐集』する必要があった事情は、確かにあったんだな」

ユーノから報告を受けたクロノがうなった。

「ですが、今の状況を打開する情報はありませんでした」

シャルがうつむく。

彼女らにしてみれば、今固く閉ざされた『闇の書』をどうにかする方法の方が重要だ。

「それについて、ピュアから一つ、方法が提示されているんだが…

…」

クロノは言いにくそうに顔をしかめる。

「あの子、また無茶をする気なのか？」

ユーノは不安げに聞いた。

「『ウィジャボード』で、『闇の書』内部の管制人格と『接続』することはできるそうだ」

クロノは話す。

「『接続』した状態のなら、念話が届く。後は、管制人格に何が起こっているか聞けばいい」

というのがピュアのプランである。

「えっと、その『ウィジャボード』って、どんなものなんですか？」

シャマルが聞く。

そういえば、守護騎士達には説明していなかったとクロノは頭を掻いた。

「感覚を封じたり解放したりする『ロストロギア』だ。

それを使えば、遠く次元を超えた先にも魔法を使うことができる」

「まあ、本来は、敏感すぎる『精神感応』を封じるためのものなんだけどね」

クロノの説明にユーノが捕捉で付け足す。

つまり、あの真っ白な少女の身体には、2つの『ロストロギア』が埋め込まれていることになる。

1つは『シルマリル』。

生体機能を維持するためのもの。

もう1つは『ウィジャボード』。

拒絶反応とも取れる、『レアスキル』の暴走を抑えるためのもの。

それぞれに問題があり、1つ目は死の寸前に転生してしまうというもの。

転生先は完全にランダムで、高次元空間で肉体を修復してから、通常空間に出現する。

本人は何も語らないが、決して良いことがなかったのは、その沈黙が物語っていた。

2つ目は『ウィジャボード』の使用による肉体への負荷。

過去に一度だけ、『接続』による人殺しを強要されたことがあり、そのときはリハビリが必要になるほどに衰弱したらしい。

最近では、次元航行艦『アースラ』内部に念話を届かせた程度のことでも、しばらく意識を失っていた。

『ウィジャボード』自体が、制限なく悪用されれば、管理局すら無抵抗に壊滅させられる強力な兵器となりうることもあり、何度も狙われていただろう事は想像に難くない。

「そんな……それじゃあ、あの子は自分の意思で『ウィジャボード』を使おうとしているんですか!？」

「さすがに管理局尉官以上の許可が要るんだが……許可を出すかどうかで、論争になってる」

「ピュアの故郷を滅ぼしたのは、管理局ができる前の旧ミッドチルダ共和国が使用した『ロストロギア』なの」

クロノとリーゼアリアが説明する。

ミッドチルダとシェオールの戦争による流れ弾がピュアを殺したというのが、時空管理局内部の定説である。

『闇の書』事件の遺族の感情もあり、色々な意味で被害者である少女に苦痛を強いる方法に、そう簡単に許可を出せないのだ。

翌日。

12月12日。

状況が一気に動いた。

時空管理局本局の顧問官であり、フェイトの保護観察を担当した提督ギル・グレアム。

彼が、様々に行なわれていた論争を無視する形で、ピュアのプランに許可を出したのだ。

『ウイジャボード』で『夜天の書』の管制人格に接続され、球状の魔法陣を通して守護騎士を代表し、シャマルが念話を送る。

『こつやってお前達と話すのは何百年ぶりかな』

シャマルの呼びかけに対して、『夜天の書』の管制人格は感慨深げに応えた。

『すみません時間がありません。先に『書』の状況を説明してください』

『ああ、すまない』

完成人格が言うには、『シルマリル』とは『夜天の書』であつた頃に関わつたことのある、星を軽く粉碎するほどの力を秘めた青い宝玉だそうだ。

その時に『書』の全666ページが埋まるほど『蒐集』しても問題無いことを知っていたため、躊躇っているシャルの代わりに『蒐集』を実行した。

管制人格の方が守護騎士よりも『夜天の書』のアクセス権限は上位にあり、シャルからの操作を受け付けなかったのも、管制人格がアクセスを制限していたからである。

ところが、途中で『シルマリル』側から強制的に膨大な魔力が送り込まれた。

それが『書』の各所に異常を発生させ、管制人格は慌てて『書』を強制休眠状態にしたのだ。

その異常の修復に時間がかかり、『蒐集』も今は機能しなくなっている。

ただ、守護騎士プログラムはどんな作用が起こつたのか、今は『書』から切り離され、主に直結している状態だ。

だから、今の主への浸蝕は、『書』ではなく守護騎士4人を維持する負担によるものである。

悪いことばかりではない。

転生機能や、主を浸蝕、吸収したり、呑み込んでしまつたりする防御プログラムのバグまでもが機能停止に陥っているのだ。

つまり、今なら外部から『書』に干渉しても、転生機能が働かないのである。

『今の内に『書』を破壊すれば、主はやては助かるだろう』

『その場合、私達はどうなりますか？』

『主の魔力資質^{リンカーコア}は戻らない。おそらく、そのままなら消える』

『そう、ですか……』

『逆に言えば、魔力の供給源があれば存在し続けることは可能だ』

『誰か、別の人に主になってもらえば、存在し続けることができるという事ですか？』

『そういうことだな』

第14話、接続、原因究明（後書き）

ピュアが『闇の書』に執着するのには理由があります。

第15話、希白の秘密（前書き）

前半、R15っぽいところがあります。
後半、ダークネスな部分があります。

第15話、希白の秘密

それが当たり前だと思っていた。

だから、皆は法に従い、正義の名の下に悪を裁いた。しかし、それは本当に正義だったのか。

その感情は本当に正義だったのだろうか。

彼女を前にすると。

その髪も瞳も肌も、真っ白に変わり果ててしまった少女を見ていると、思うのだ。

人が法のためにあるのではない。

法が人のためにあるのだ。

そんな、基本的なことを思い出してしまう。

自分に権力を与えられた理由。

管理局が正義である理由。

民が守られなければならない理由。

簡単なことのはずなのに、忘れてしまっていた。

そんな自分に恥じ入る。

『どうして、助かる人なのに、どうして助けちゃいけないさ!』

フリーで傭兵をやっている魔導師を雇い、『闇の書』を破壊しようとした遺族に対して、真っ白な少女の叫び。

どこからか、今なら『闇の書』を破壊しても転生が起こらない、という情報が漏れていた。

それを調べていた捜査官から、話題になっている少女の言葉を聞いたのだ。

確かに、警察機構でもある管理局に在籍する以上、その言葉を否定するわけにはいかない。

今横行している魔法至上主義は気に入らないが、その感情の根底にあるのはその言葉だった。

優秀な人材が『海』に流れていくのは気に入らないが、それは自分の感情でしかない。

そんな事を考えながら。

レジアス・ゲイズは、秘書である娘オーリスに、懲罰任務の割り振りに使う、ヴォルケンリッターのデータ集めを命じた。

本局のメンテナンススタッフ、マリエル・アテンザ。

それに、ピュアとはやて、ユーノ、シャマル。

5人で、技術的なことを色々と相談する。

題して『夜天の書の管制人格改めリインフォース救出作戦』。

『リインフォース』という名前は、はやてが『呼びにくいし、『闇の書』ってなんか嫌や』という理由でつけた。

英語で『強化する』という意味がある。

単に、ぱつと出てきた語感が綺麗な単語、ということだったが、『

夜天の書』の管制人格は気に入っているようだ。

これは、最初の『接続』の時にシャル経由で確認されている。

「自分ではどうにもならなくて、ずっと苦しんできた人だから、なんとかして助けたいさ」

「ええ子やなー、ピユアちゃん、ホンマにええ子やー」

病室でベッドに座っていたピユアにはやてが抱きついた。

「ひあゝっ!？」

真っ白な少女は悲鳴を上げる。

「こんな可愛い子、私が男の子やったらほっとかへんわ」

言いながら、はやてはピユアの服の下に手を這わせた。

「きゃーっ、だめえっ!」

「ふははー、ここがええのんかー」

「こらこら、いい加減にしないと、ユーノ君が困ってるよ?」

マリエルが注意する。

「なんや、混ざるん?」

「えっ!?!それはちよっと……」

薄い茶髪の少年は顔を真っ赤にして、首と手を横に振った。

「まあ、冗談はこの辺にしといて」

ぐったりしている白い少女を解放し、はやては皆の方に向き直る。

「どうにかなりそうなん？」

「それについてピユアちゃんに色々意見を聞こうと思ってただけだね？」

マリエルは虫の息の少女を指差した。

誰かさんが散々弄ったおかげで、休ませなければとても説明などできそつもない。

「あ、あはは……ごめん……」

頭を掻き、はやてはちろりと舌を出した。

リインフォースの話を要約すると、今『夜天の書』の機能は大半が停止しており、守護騎士システムは主であるはやてに直結している。はやての『リンカーコア』が『夜天の書』に吸収されている現在も、無いはずの魔力を搾り出そうとして、結果的に浸蝕と同じ症状が出ている。

だから、魔法的なエネルギーを注ぎ込む方式の、シェオール式回復魔法が通じるのだ。

このまま『夜天の書』が破壊されてしまうと、主であるはやての魔力が戻らず、ほんの数日で守護騎士達は消えてしまう。

それを回避するために、一度別の魔導師に主となってもらう必要があった。

それはいい。

古代ベル力の騎士ともなると、使い手は稀少で、しかもシグナム達は猛獣フォームのクリアと単体で渡り合えるほどに強い。

欲しがる人はいくらでもいた。

問題はこのままでは助からない管制人格、リインフォースだ。本人は覚悟を決めているようだったが、それははやてが納得しない。そこで、本局のメンテナンススタッフであるマリエルは、白紙の人格型デバイスの中にリインフォースの人格データを退避させてはどうかと考えていたのだ。

ユーノも、アイデアを持ち寄って来ていた。

それは魂を抜き取ってしまう『ロストロギア』を使用すること。人間に使うと、人格や記憶を入れ替えてしまったりするため、危険物として封印されていたのだ。

危険度は第二級。

『無限書庫』で説明書が見付かり、現品も保管されていたので、今クロノに頼んで使用許可が降りるものかどうかを聞いてもらっている。

一応、ユニゾンデバイスの人格を入れ替えた事例もあるそうだが、だから、デバイスの管制人格であるリインフォースにも有効だろう、とユーノは考えていた。

2人とも、似たようなアイデアである。

いずれにせよ、このまま放置するのは危険と判断していた。

ピュアが提案したのは、もっと大胆な方法だった。防衛プログラムや転生機能が働かないのをいいことに、『夜天の魔導書』のプログラムの大半を書き換えてしまおうという考えである。

もちろん、現状のままというわけにはいかない。改変された部分を完全に戻すこともできないだろう。

しかし、ブロックごとに分割して危険部位だけを破壊することなら
できるかもしれない。
今はほとんど動けないとはいえ、リインフォースの力を借りること
もできるのだ。

外科手術のように、繊細で精密な技術が必要とされる。
時間もかかるだろう。

だが、成功すれば、はやての『リンカーコア』、リインフォース、
この両方を救うことができる。

3つの案を伝えるべく、リンディ立会いの下『接続』が行なわれる。

『却下だ』

そのリインフォースが、ピュアの案を却下した。
ユーノが言う『ロストロギア』なら、まだ可能性があるとのことだ
が。

『それは、どうして?』

『『ウィジャボード』を使えば確かに可能だ。少しずつ分けて行な
えば、ピュアの体力も持つだろう』

『それなら、どうしてダメなんですか?』

『私の見立てでは、早くて2年かかる。防衛プログラムが転生機能
を復活させるには十分な時間だ』

『そんなにかかるんですか?』

『本人は隠したがっているようだ、『ウィジャボード』の設定変
更と検索魔法程度で、普通は気絶したりしない。

結果式の回復魔法の方が、肉体にかかる負担は大きいはずだ』

『それって……え……どういう……?』

日に5回ほど使用できる回復魔法。

『ウィジャボード』は2日に1回程度しか使えない。肉体にかかる負担は、てつきり『ウィジャボード』の方が遥かに大きいものだと思い込んでいた。

しかし本来、肉体への負荷率は逆に、『ウィジャボード』の方が少ない。

つまり、ピュアが『接続』によって気絶するのは、別の要因によるもの。

『『接続』には強烈なフィードバックが起こる。

彼女の場合は『接続』対象の感情がダイレクトに流れ込んでくるといふものだ。

心無い使用者が『接続』対象を殺せば……』

当然。

死の苦痛がピュアの心を切り刻むことになる。

それは、

乱暴された女性が男性を拒絶するように。

目の前で親を惨殺された子供が、声を失うように。

虐待を経験した子供が、夜の闇を怖れるように。

つまり。

『ウィジャボード』を使用したときの衰弱は、心的外傷トラウマによる『フラッシュバック』。

『フラッシュバック』とは。

強いトラウマ体験（心的外傷）を受けた場合に、後になってその記憶が、突然かつ非常に鮮明に思い出されたり、同様に夢に見たりする現象である。

（ ウィキペディアより抜粋 ）

それが死の苦痛ともなれば、意識を失う程度では済まない。
悶絶し、泣き叫ぶような、目も当てられない発作が起こってもおかしくない。

彼女は、その強靱な意志の力で精神的な拒絶反応を押さえ込み、トラウマのことを周囲から隠していたのだ。

『接続』が解除された後、シャルルは意識を失った少女を抱えて泣いた。

真っ白い、色素が抜け落ちた。

燃え尽きたように白く、変わり果ててしまった。

1人の少女を。

第16話、秘密の理由（前書き）

大半説明か考察です。

説明内容がダークネスです。

第16話、秘密の理由

『接続』の後、突然泣き出したシャマルは、泣き疲れて眠った。しばらくしてから再び目覚めて落ち着いた後。

シャマルは、『接続』に立ち会ったリンディにだけ別室で、ピュアの、最後の秘密を明かした。はやてやユーノのような、少年少女達に聞かせていい話ではない。リンディもそこに納得する。

ピュアが死と共に、どこへとも知れぬ場所へ転生してしまうことを知ってしまったっている子供達。特に、以前一度彼女を逮捕したクロノは、聞けば立ち直れなくなってしまう。

『ジュエルシード』事件の後、アルフがリンディだけに話していたピュアの謎が解けた。

強力な回復魔法を使った時はそれほど疲労した様子はなかったのに、性能が高いとはいえ広域探索魔法を使っていた時だけ、寝込むほど衰弱していたのだ。

それはつまり、探知に類する魔法を使うたびに、トラウマの影響を受けていたという事である。

さらに、おそらくはフェイトの母親プレシアも、似たような話を聞いている。

アリシア復活に執着し、『アルハザード』に渡ろうとしていたという事を、アルフ経由でリンディは知っていた。

そのために『ジュエルシード』を利用しようとしていたらしい。

しかし、突然の断念。

ピュアが兵器に改造されることで蘇生し、制御できないレアスキルが発現してしまった。

それを封じるために別の『ロストログア』の一部として再び改造し、それでも問題が出た。

『アルハザード』の技術には落とし穴しかない。

そんな話を聞いたからだと思っていた。

アルフの話では、ピュアは『身の上話をしただけさ』と誤魔化したと言う。

違うのだ。

誤魔化してなどいない。

自分が迷い込んだ地獄の一端を話したただけだ。

プレシアの娘アリシアが、ピュアと同じように変わり果ててしまうかもしれない。

そんな可能性を示唆するだけでよかった。

そしてその可能性を見過ごすことは、ピュアにはできなかった。

万に一つでもそうなる可能性があるのなら、到底見過ごすことなどではしない。

死んだ娘を蘇らせようとして、悲惨で過酷で無残な運命を背負わせてしまうかもしれない。

それが『アルハザード』の『絶望の都』たる所以。

プレシアは悩んだだろう。

娘を蘇らせなければ、自分を保つことなどできない。

しかし、『アルハザード』は、より残酷な現実を突きつけた。

娘を地獄に落としてまで、自分は娘を蘇らせなければならぬのか。

25年探して、辿るしかなかった道を、諦めなければならぬ。

ピュアの『精神感応』は、そんなプレシアの極限の葛藤を聞き届け
ていた。

そんな心の声を聞いてしまったなら。

放っておくことなど、できるわけがない。

自分の母親と同じことを考えた女性に、『諦める』などと、言える
わけがなかった。

ピュアが自分が罪を被る覚悟で『ジュエルシード』を研究し、プレ
シアに新たな希望^{フリン}を提示したのは、彼女にとっては義務のようなも
のだったのである。

もちろん、それによって罰を受けることも。

思えば。

フェイトとなのはの決闘をお膳立てしたとき、念話に邪魔が入らな
いように、『ウィジャボード』を使った。

そのとき3時間ほど意識を失っていたそう。

そのときは、魔力の消費による肉体負荷によるものと本人は説明
していた。

まさか死の苦痛を伴っていたのだとは、フェイトもなのも思っ
ていなかったはずだ。

それが知られれば、優しいフェイトは心に大きな傷を負っていたか
もしれない。

だから。

ピュアは体が弱いからと嘘をついた。

また、『闇の書』の主選ばれてしまったのはやてを助けるのに、積
極的に『ウィジャボード』による『接続』を提案した。

これはおそらく、『ウィジャボード』使用への抵抗感がピュア自身

にはあまりないことを示す、ポーズでもあったのではないだろうか。
ピュアの誤算は、リインフォースがそのことに気付いていたということだろう。
それゆえに、シャルはそれを聞いて涙し、今こうしてリンディにも伝わってしまったている。

「子供達に、なんて説明しようかしら」

リンディは頭を抱えた。
ピュアの自分への肉体負荷に関する説明が、全部、死の苦痛を隠すための嘘だったなどと。
言えるわけがない。

今なら『闇の書』を擁護しようとしていたピュアの気持ちだが、痛いほどわかる。

『痛くて、辛くて、苦しくて。それでも、差し伸べられる手に噛み付かないといけない』

まさに『闇の書』はそういう状態だった。

彼女はそれを敏感に感じ取り、守護騎士達や管制人格リインフォースを助けようとしている。

助かるかもしれないから。

自分と違って、無限地獄から抜け出すことができるかもしれないという、希望があるから。

放っておけるわけがなかった。

死の苦痛スリッパのせいでできませんでしたなどと、言えるわけがない。

涙を流しても、じっと俯いて。

どんなに苦しくても、『苦しい』などと、ひと言も言えない。差し伸べてくれる手の主が優しければ優しいほど。

支離滅裂な嘘をついてでも、隠し通さなければならぬ。

『闇の書』は。

大勢の人々から『蒐集』しなければならなかった。

結果の如何に関わらず、主を殺さなければならなかった。

ピュアは。

『ウィジャボード』のことを隠すため、どんな悪夢につながれようが、『大丈夫』と言わなければならない。

迷惑をかけないために、孤独でなければならない。

それまでは存在すらも知らなかった管理局に『ウィジャボード』のことを明かしたのは、信頼の表れでもあった。

守護騎士達が、管理局への投降を決断したように。

多くの『ロストログア』を封印し、次元世界を守ってきた管理局ならば、悪用しないに違いないと。

自分達がしつかりしなければならない。

リンディはシャマルに、この事実は誰にも話さないように釘を刺した。

シャマル自身、リンディ以外に話す気はなかったようだ。

お互いに、この秘密は墓場まで。

そう誓い合った。

第17話、リインフォース救出（前書き）

ネタバレ。

リインフォースは助かります。

第17話、リインフォース救出

リンディとシャマルの会談の翌日。

「……おお……！」

「できたか……！」

タレ犬耳の大男ザフィーラと、赤髪の少女ヴィータは感嘆の声を上げる。

目の前には、9歳くらいの、茶髪の少女の姿。

頭には尖った猫耳、ヒップには同じ色の、うねうねと動く尻尾。

色彩を纏ってはいるが、顔の輪郭などは主であるピュアにそっくりだった。

「おおー！かわいい〜！」

猫素体の使い魔であるリーゼロッテが目を輝かせる。

ピュアの使い魔クリアが、変身魔法『少女フォーム』を覚えた。

ザフィーラが模擬戦で確認してみたが、ちゃんと死人が出ないレベルにまでパワーが抑えられている。

これで、命の危険を感じながら模擬戦をしなくていいんだと、ヴィータが泣いていた。

時々挙動が猫になってしまふのはご愛嬌である。

「にゃあ」

相変わらず、話すのは言葉ではなく鳴き声だったが。

機能不全を起こしてしまっている『夜天の書』について。

皆が持ち寄った案を、そのときの『接続』に立ち会っていたリンデイがまとめ、今後の方針を決めた。

「へえ、それじゃ、はやてちゃんの『リンカーコア』も戻ってくるかもしれないんだ……」

お見舞いに来たなのは、はやてに話を聞いていた。
フェイト、ピュア、シャルも同じ病室に来ている。

『子猫フォーム』のクリアの姿もあった。

リンデイがまとめたのは、3人全員の案を足して3で割ったようなものだった。

ピュアは『闇の書』を『ウィジャボード』による『接続』を利用した干渉によって、安全に、かつ慎重に解体しようと考えていた。
しかし、リインフォースが言うには、防衛プログラムが転生機能を修復するのに間に合わないほどの時間がかかってしまうらしい。

そこで、ユーノが提示した案である、別の『ロストログア』を使用する。

これは記憶と人格を入れ替えてしまうもので、リインフォースを外に退避させようというのである。

退避させるには入れ替わって『夜天の書』に入る人格が必要になるが、実は無地の人格で代用できるという裏技があった。

要はAIを入れていない人格型インテリジェントデバイスがあればいいのである。

この裏技を実現するのは、デバイスマイスターであるマリエルが用意した、プログラムが入っていない高性能の人格型インテリジェントデバイスになる。

『ロストログア』として猛威を振るったデバイスなだけあって、『夜天の書』の管制人格を記憶ごと受け入れることができるデバイスを用意するのは骨が折れたそうだ。

後は、可能な限り迅速に『夜天の書』を解体し、はやての『リンカーコア』を持ち主に戻してから、完全に消滅させるだけである。さすがに元の機能を再現するには至らず、『蒐集』をはじめ、様々な機能が失われることになる。

だがそれは仕方がないと、リインフォースもはやても納得済みであった。

リインフォースとはやての魔力資質が元に戻るだけで御の字としなければならぬ。

もつとも、その詳しい理由をリンディが話すことはなかったが。

ともあれ、人格を入れ替える『ロストログア』の使用許可が下りれば、計画の第一段階であるリインフォースの救出は完了する。

「楽しみやなく、どんな子なんやろ？」

はやては早くも、まだ話したことの無い管制人格リインフォースに思いを馳せていた。

ユーノは説明書を読みながら、固く閉ざされたままの『夜天の魔導書』と、同じく青い魔導書型の人格型デバイス、それに裏表が両方とも光を反射するようになっていて手鏡を配置する。

この両面の手鏡が『ロストログア』である。

配置が完了すると、後は『ロストログア』を起動するだけだ。

12月25日。

事件全体を担当するリンディとクロノ、エイミィの立会いの下、儀式は行なわれた。

場所は本局の訓練場を借りている。

車椅子のはやて、その車椅子を押す私服姿のシグナムに、他の守護騎士達も見守っていた。

フェイト、なのは、ピユア、クリアの姿もある。

クリスマスを友人宅で祝った後、はやてが入院しているミッドチルダの病院の方でもパーティを開催しようとしていたのだ。

その時にユーノから話を聞いて、それならと儀式の立会いに参加することにしたのである。

訓練場を借りたのは、何が起こるかわからないという、クロノの警戒心からであった。

『ロストロギア』に対する『ロストロギア』の使用が何をもたらすか、想像もつかない。

だから、なのは達が見学するのは別室で、映像越しになる。

「それじゃあ、始めるよ」

ユーノはクロノが頷くのを見て、両面鏡の『ロストロギア』を起動した。

七色の光が放たれる。

それが球状に、2冊の魔導書を包み込んだ。

光が収まった後、青い魔導書が光を発しながら浮かび上がる。

「ええっと、リインフォース、さん？」

ユーノは遠慮がちに声をかける。

“……こちらは問題無いようだ。手間をかけた。ありがとう”

「い、いえ、僕は友達の願いを叶えただけで……」

リインフォースの感謝の言葉に、少年は照れた。

クロノはやれやれと肩を竦め、声をかけようと近付く。

そのとき、それまで沈黙を保っていた黒い魔導書が、脈打つように黒い光を放った。

「なっ!？」

クロノが咄嗟に反応し、『ストラグルバインド』で黒い本を押さえ込む。

これは拘束魔法のリソースを魔法の解除や魔力の減退にシフトしたもので、魔法生物に対して特に高い威力を発揮するものだ。速度や強度において通常の拘束魔法に劣るが、動かない物体から溢れ出した魔力を封じる分には問題なかった。

“ 防衛プログラムの強制干渉だと!？”

リインフォースが声を上げた。

何か、不測の事態が起こっているらしい。

「どっということだ？」

クロノは青い魔導書に聞く。

“すまない、してやられた”

防衛プログラムは、『夜天の書』を維持するためのプログラムである。

そのため、管制人格が乗っ取られた場合、固定防御形態に移行するようにになっていた。

それは本来、暴走対策でもあり、『闇の書』に改変された時に破棄されたばかり思っていたのだが。

どうやら、管制人格が書の完全破壊を決定した時に起動し、防衛プログラム内部の幾つかの機能を作動させるように改変されていたらしい。

それもこれも、巧妙に隠されていたため、数百年間、管制人格すら把握できていなかったのだ。

「なんて置き土産だ！」

クロノは毒づいた。

「本当に悪意しか感じられないよ！」

ユーノも叫ぶ。

話を聞いている間にクロノの『ストラグルバインド』が弾け飛んだ。脈打つように、黒い魔導書の黒い光が増す。

“はやてを取り込んで暴走する気だ！”

「どうすればいい！？」

“消し飛ばすには時間がない、転送を！”

「了解！」

リインフォースの返事にリンディが応えた。

「無人世界に飛ばすわ！エイミィ、クロノ、サポートをお願い！」

「了解！」

『了解！』

そして10分後。

「な、何が起きたの……？」

モニタ越しに見学していたなのはが呟く。

「はやて！はやてえっ！？」

なぜか、はやては車椅子にもたれたまま、静かに意識を失っていた。

第17話、リインフォース救出（後書き）

はやても無条件で助かると思った人、何人くらいいますか？
次話、あんまりいい話ではありません。

第18話、決戦へ（前書き）

のっけからいい話ではないです。

第18話、決戦へ

その主は、リインフォースを毛嫌いしていたらしい。理由は、平穏な生活を乱したからだという。

初老の男で、山奥でひっそりと暮らしていたそうだ。

夢は自分が書き記した書物が後世になって歴史に残る名著になると。

そんな壮言になるほどと、唸るほどの文豪であった。

『夜天の書』の管制人格として、守護騎士達と共に男の世話をした。『蒐集』という使命はあるが、主が乗り気でない以上、次の機会を待つしかない。

しかし、平穏は長くは続かない。

遠くの戦火が間近にまで迫ってきたのだ。

『夜天の書』という力を持つ以上、民が苦しむのを黙って見ているわけにはいかない。

男は戦い、そしてすべてを喪った。^{うしな}

戦ったがゆえにより戦力を集中され、気付いたときには死ぬしかないところまで追い詰められていた。

自分の戦いが、より民を苦しめている。

それまで書いていた書物は、かつての棲家と共に焼き払われた。

夢と誇りを喪った男はすべてを呪い、『夜天の書』の改変に手を付けた。

せめて、一矢報いるために。

止めようとした管制人格は、男が作り上げた防衛プログラムに干渉

できなくされてしまった。

それが彼女らの悪夢、『闇の書』のはじまりである。だから、嫌がらせのように、主よりも『夜天の書』をより苦しめるような、そんな改変が行なわれていたのだ。

リインフォースの説明によると。

はやては魂だけを取り込まれてしまっているらしい。

『夜天の書』が転生せずに転送先で暴走しているところを見ると、完全な吸収にまでは至っておらず、はやての魂を『核』として、無秩序に暴れ回っている状況になる。

転送した先は、生物が存在しない次元世界。

幾ら暴れようが被害は出ないが、このままでは力を使い果たして、はやての『リンカーコア』に異常が出る。

最悪、魂が壊れてしまうかもしれない。

それをどうにかするには。

魔力が籠っていない物理攻撃だけで、『夜天の書』の暴走体を叩きのめすしかない。

魔力が籠れば、はやての『リンカーコア』にダメージを与えたいう事であり、そこにあるはやての魂にも影響を与えてしまう。

ピュアがシェオール式の考え方で補足するが、ここでは割愛する。要は今回、はやての魂の器が人間のそれではないため、魂が肉体に引き摺られにくくなっているということだ。

問題は管理局の魔法至上主義であった。

つまり、質量兵器の使用が認められていない。

ミッドチルダ式の魔法は、非殺傷設定に対応させている性質上、魔力を乗せてはいけない今回の戦闘では御法度である。

ゆえに、身体強化で充分戦えるベルカ式、つまり守護騎士達が今回の主力、ということだ。

「つてことは、『猛獣フォーム』のクリアが最大の戦力つてことだよな」

「使い分けはできるのか？」

「じゃあ」

「たつ、多分大丈夫さ」

「すっげー不安だ……」

「私達、何かできることはないのかな？」

「攻撃魔法を使わずに取り押さえればいいわけだからな。防御やバインドでサポートはできるはずだ」

「あ、それなら私もできるの！」

「今回は僕の方がなのはより役立つかもね」

「うー、ユーノ君がいじわるなの！」

『アースラ』経由で、本局に近い次元世界に転移する。

一面が砂漠化していて、生物も死滅していた。

過去に大きな戦争が起きて、核兵器のようなものが大量に使用され、滅んだのだそうだ。

今でこそ、数日の滞在なら何も問題無いレベルだが、当時は防護もせずに転移すると即死するレベルの毒ガスが充満していたらしい。

「転移させていなかったら、本局が壊滅していたかもしれないな…」

…」

紋様のように広がる破壊痕を見て、クロノはつぶやく。
サーチャーからの情報では、3キロほど離れた場所に『夜天の書』
の暴走体がいるという。

作戦は以下の通りだ。

ヴォルケンリッターの前衛3人とクリア、アルフが直接攻撃。
なのは、フェイト、ユーノ、クロノは、サポート。

全員で取り押さえ、シャマルとリインフォースが防衛プログラムの
『コア』を抜き出し、ピュア、マリエル、リンディと一緒に即時解
体する。

ピュアが『ウィジャボード』を使って瞬時に『コア』を抜き取ると
いう案を提示したが、シャマルとリンディに却下された。

クロノが皆に作戦を確認し、暴走体が暴れている場所に移動を開始
する。

リンディが結界を展開し、『コア』を確保できた時には『アースラ』
で待機しているピュアとマリエルを転送させる手筈だ。

マリエルは元々魔導師ではないし、ピュアの魔法は高速戦闘に向か
ない。

だからこそその措置である。

暴走体は1人の少女の姿を模^{かたど}っていた。

“ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル、ハカイスル……”

壊れたレコードのように、不明瞭な言葉を繰り返す様は恐ろしげですらある。

長い黒髪、黒い瞳、白くはあるが、肌色に近い皮膚の色。

剥き出しの顔には、回路のような赤い紋様が浮かび上がっていた。

表情はなく、機械のような印象を与える。

黒いワンピースのロングスカートの上から、黒い長袖のコートを羽織っていた。

手にはベルカの象徴である剣十字のついた杖。

“……テキヲミトメル”

黒く濁った瞳がぎょろりと動き、接近してくる守護騎士達に向いた。

“――、――”

高く澄んだ、流れるような詠唱。

黒いベルカ式の、3つの円を繋いだ三角形の魔法陣。

それは無数に、3重の螺旋を描くように展開された。

周囲がレンズのように歪む。

黒い魔力光が広がり、螺旋に展開された魔法陣に魔力を満たしてい

った。

“『グーングニル』”

恐るべき範囲と威力と速度を併せ持った黒い魔力光が、一瞬にして
シグナム達を飲み込んだ。

第19話、亡国の希白魔女（前書き）

決戦です。

第19話、亡国の希白魔女

シグナムは致命的なミスに気付いた。

無理をしても至近距離に転移させてもらい、奇襲を敢行するべきだったのだ。

あまりにも遠距離なら、砲撃も届かないと高を括っていた。

一体誰の『魔力資質』を『蒐集』したのかを、不覚にも忘れていた。それがこの結果である。

超遠距離砲撃が放たれたのは、無人世界に彼女らが降り立って5分ほど後のことだった。

『アースラ』からの警告がなければ、全滅していた可能性もある。

盾の守護獣であるザフィーラが前に出て、同じく防御が得意なアルフ、ユーノが全力で防御して。

どうにか防ぎ切ったが、ザフィーラとアルフがダメージを受け、意識を失った。

ユーノは、なのはに支えられていなければ、飛んでいることも難しい状態。

ミスの代償はあまりにも大きかった。

「最高速で接近する。第二波を撃たせれば、今度は防ぎ切れない」

「それしかないな。エイミィ、3人の回収を頼む」

シグナムの意見に、クロノは頷く。

「置いていくの!？」

「シグナムが言っていただろう。次は防げない。撃たれる前に接近

しなければ、今度こそ終わりだ」

なのはは渋っていたが、シグナムとヴィータは話が終わるのを待たずに再加速を始めていた。

『あれは我々が知っている管制人格の姿ではないな』

『ああ……でも、あたしらが女で蒐集したのって、ピュアだけだぞ？』

高速で飛びながら、ヴィータは疑問を返してくる。

『背丈格好も近いが、あまりにも印象が違う。だが……認めるしかない』

あの黒髪黒目の少女は、ピュアを模ったものである可能性が高かった。

『ってことは、さっきのってシエオール式の砲撃ってことなのか？』

『そうだな。^{ハイブリッド}混成魔法の可能性もある。ともかく、時間を与えずにたたみ掛けるしかない』

『こんなこと言っちゃいけねえかも知れねえけど、シエオールを滅ぼすのに『ロストロギア』が使われたって話、すっげえ納得できる』

『わからんでもないが、今はあれを倒すのに集中しろ』

『お、おう』

シグナムも、実はヴィータと同じことを考えていた。

ありえない遠距離からの、回避も防御も困難な砲撃。

いや、『爆撃』。

戦争を知る者なら、その重要性は身に染みてよく知っている。

いわゆる、戦略兵器。

それがシエオール式攻撃魔法のコンセプトなのだ。

ベルカ式は個人戦レベルでは他の追随を許さない性能を誇る。兵士一人一人が一騎当千の強者になることができるベルカ式は、確かに強い。

しかし、ミッド式は誰でも、それなりに強くなることができた。これは戦術レベル、集団戦で高い威力を発揮すると言っていい。

質のベルカ、量のミッド。

ところが、シエオール式はこのどちらでもない。

条件さえ整えば、一軍を一瞬にして消し飛ばす圧倒的な面制圧力こそが、シエオール式の真骨頂なのである。

ベルカの騎士ならば、それなりに対応可能だが、集団戦法が得意なミッド式は相性が悪い。

つまり。

旧ミッドチルダ共和国は、シエオールに対して、安易に世界を破滅させる『ロストロギア』を使用したのではない。

シエオールを攻略するためには、使用せざるを得なかったのだ。

シグナムとヴィータ、クリア、それにクロノとリンディとなのは、フェイトが連携して、暴走体となっている少女に攻撃を仕掛ける。しかし、物理攻撃のみという制限がある中で、暴走体の防御魔法を貫いてダメージを与えるのは容易ではなかった。

いや、防御魔法を破壊するというよりも、回復結界の回復速度を上回る火力を出すことが難しい。

あの、ピュアが随所で披露していた、ほんの1分ほどで魔力ダメージや疲労を完全回復してしまう結果だ。

これがなかなか曲者で、暴走体の肉体が魔力で生成されたものであることも手伝って、ほぼ瞬時に元通り回復しているような印象を、シグナム達に与えていた。

“『デアボリック・エミッション』”

黒い魔力光が黒髪の少女の体から溢れる。

攻撃がほとんど効かないのをいいことに、ダメージを無視して詠唱するのだ。

そのため、連続して攻撃し続けることも出来ない。

「うがーっ！」

魔法の発動寸前にタイミング良くクリアの回転体当たりが直撃した。黒髪の少女の身体は、大きく吹き飛ばされ、魔法の発動が中断される。

金色の縞模様にも並みを変化させた『猛獣フォーム』のクリアの、死人が出かねない物理攻撃力は、暴走体に対しても有効であった。さすがは生態調査すら難しい危険生物『ラージャン』が素体なだけはある。

暴走体もそれが解っているのか、飛行魔法が使えないクリアの土俵である地上から離れようとする。

それを押し留め、地上に誘導するのがシグナム達の仕事であった。

だが、一方的に攻撃しているように見えても、その実、回復結界と

高い防御力の前に、ほとんど攻撃が通っていない。

相手も攻撃魔法の出掛かりを潰され続け、反撃の糸口が掴めないでいた。

作戦ミスによる、ユーノ達3人の脱落があまりにも大きい。

突如として地面に1つの魔法陣が出現した。

ベルカ式を2つ重ねたようなそれには、見覚えがある。

シエオール式の魔法陣だ。

そして、シエオール式魔法の使い手は、この世に1人しかいない。

「ピュアが出てるのか!？」

『今2キロ西側に離れてる。そこから届かせるって言うてたけど』

怒鳴るクロノにエイミィが通信を入れる。

『ごめん、グレアム提督から許可出ちゃって、止められなかったの』

『アースラ』の方も、大変だったようだ。

地上も大変なことになっていた。

「なっ!？」

確認を取るために少し目を離していた隙に、凄まじい速度でシエオール式の魔法陣が増えていたのだ。

大地を覆い尽さんとする無数の魔法陣。

シエオール式攻撃魔法は戦略級の破壊力。

それを示す、とてつもない規模の魔法が発動しようとしていた。

『召喚爆撃行くさ。地上に退避を』

耳慣れない言葉。

『召喚爆撃？』

クロノは聞き返した。

『爆弾を召喚するさ』

『爆弾！？』

『グレアムさんをお願いしたら、用意してくれたさ。建築物解体用のプラスチック爆弾1000本』

『質量兵器だぞ！？』

『だから、今回限りさ』

『クロノ、ピュアちゃんのことだから、どうせ言っても聞かないわ。それより、どうやって起爆するの？』

『それは……』

リンディの質問に、ピュアが言葉に詰まる。

どうやら、そこまでは考えていなかったらしい。

『点火はこちらで引き受けるわ。なのはさん、お願い』

『うん！』

リンディが指示を出し、なのはが勢いよく頷いた。

全員が地上へ退避したのを確認してから、リンディはピュアへ合図を送る。

「ファイト・イッ・バーツ
“ 召喚爆撃開始 ”」

なんだか、懐かしい気持ちになった。

プラスチック爆弾が入ったカプセルが、暴走体がいる空へ向けて、
一斉に射出される。

文字通り、視界が爆弾で埋め尽くされた。

「『デivainバスター』!」
“ Divine buster ”

桃色の光が、射出された爆弾群に火をつける。

その用途上、暴走体には当てないように。殺傷設定で。

ゴッ

意外なほどに鈍い重低音が響いてきた。

空に回避しようとした暴走体は、面で襲ってくる衝撃波を回避しきれない。

また1000発もの爆弾による衝撃波は、魔法による防御を、いとも簡単に破壊した。

たとえ衝撃波に耐えたとしても、荒れ狂う乱気流も発生し、いずれにせよ無事には済まない。

爆炎を突き抜けて、意識を失って墜落してくる少女の身体を、シグナムが受け止める。

「捕まえた!」

シャマルが叫んだ。

“『コア』の捕捉に成功した。これより摘出に移る”

こうして、予想外の出来事が続いた作戦は、解体作業を残すのみとなった。

第19話、亡国の希白魔女（後書き）

最後の決戦です。

主人公側にとつてはかなり不利な条件を設定しました。

全体を通して、ファンタジーというよりもむしろ、ドラマに近い心の動きなんかを中心に構成しています。

予想を覆すような展開も、実は現実に近いような結果でもあります。

そうそう物事が上手い具合に展開することなんて無いっていう話です。

原作にもそんな空気がありますし。

次話、最終です。

第20話、永遠、不死身とは。

はやての魂と『魔力資質』^{リンカーコア}は、無事摘出された。

『夜天の書』はリインフォースによって解体され、転生機能も、無限再生機能も、防衛プログラムも消滅した。

もちろん、『シルマリル』の魔力を過剰吸収したことによって、プログラムが壊れていたことが原因である。

それによって、外部から干渉することが可能になったのだ。

しかし、絵に描いたようなハッピーエンドとはならなかった。元々、シエオール式の大規模な魔法は、1人で使うようにはできていない。

それを補助したのが、リーゼロッテとリーゼアリアだった。

2人はクロノの師匠だっただけあって、素晴らしい手際でピュアの魔法を補助したのだが。

ピュアと同じ魔力負荷を受け、人間の姿を保つことができなくなってしまったのである。

また、ピュア自身も、召喚爆撃に加えてクリアをフルパワーで戦わせていた魔力負荷によって、3日間目を覚まさなかった。

主治医の話では、彼女の『リンカーコア』が通常のものだったなら、二度と魔法が使えなくなってもおかしくないほどの負担になっていたようだ。

はやては、魂と『リンカーコア』が戻されて目覚め、地球の病院に戻ってリハビリを始めている。

ヴォルケンリッターは裁判の結果、2年間懲罰任務に従事することになった。

とはいえ、はやてが家で1人にならないように、配慮がなされることになっている。

はやての影の支援者でもあったグラムは、戦闘目的でプラスチック爆弾を使用したため、

つまり質量兵器の使用許可を出した責任を取って、管理局を自主退職した。

人間の姿を保てなくなった使い魔2人のことも、契機になったようだ。

「そつか……もう、消滅しちゃったさ……」

ベッドで目覚めたピュアは、お見舞いに来たリンディから、意識が無かった3日間の経過を聞いていた。

その手には魔導書型の人格型デバイスがある。インテリジェント

リインフォースであった。

彼女は、一通りの動作確認とメンテナンスを終えて、八神はやての元に返される予定である。

今回は、リインフォースがお見舞いを願い出たのがリンディの休憩と重なったため、ここに一緒にいるのだ。

『“期待させていたようで申し訳ないが、ピュアが望んでいたものは、元々『夜天の書』には無かった”』

念話で話す。

『そつ……』

念話で返す。

これは、誰にも聞かせてはいけない話だから。

『 隔離型や超回復型の不死身人間を殺す方法なら、なんとかあったのだが……』

『 ううん、いいさ。元々、ないものねだりさ』

『 無理はするな。永遠に死に続ける苦しみは、私ならよくわかる”』

『 だめさ。ここで緩めれば、わたしがダメになっちゃうさ』

『 ……そうか』

聖祥大学付属小学校。

冬休みが明けた、始業式。

そこには、白い髪の毛、白い瞳、白い肌をした、1人の少女の姿があった。

追加して、今は白いセーラー服にロングスカート。

さらに、瓶底眼鏡。

フェイトに遅れること1ヶ月。

ピュアも、なのはと同じ小学校に通っていた。
里親になったのは、グレアム元提督。

今は八神はやての家でお世話になっている。

小学校に通うのは、家主はやての要望でもあった。

「折角小学校に通う機会があるんやから、ちゃんと学校行かなあかんで」

とのこと。

“主はやて、彼女は大学教授クラスの知識の持ち主です”

本のまま、八神家のしゃべる置物と化しているリインフォースは、冷静にツツコミを入れたのだが。

「それでもや。友達との触れ合いは、知識の中じゃできへんやろ」
“それは確かにそうです。これは学校に通うしかなさそうですね”

こうやってリインフォースは丸め込まれた。

「え、ええと……」

他の守護騎士達は傍観に徹していた。

元々、リンディが無理矢理にでも通わせる方向で説得していた話も聞いており、どうせ通うことになるだろうと思っていたからだ。
単にこの問答は、ピュアが八神家の財産で学校に通うのを渋ったからに過ぎない。

なにはともあれ。

ピュアは小学校に通っている。

それまでの転生生活から考えれば、奇跡のような出来事だった。

「ところでなのはちゃん」

「なんでしょうなの、ピュアちゃん」

「学校って何をする所さ？」

「……………」

フェイトとなのはは絶句した。

そつえば、改造される以前に学校に通ったという話は少しも聞いていない。

「あんた、お嬢様すぎ」

呆れるアリサ。

「ふふふふふ」

すずかは妙にツボに入っただようので、腹を抱えていた。

第20話、永遠、不死身とは。（後書き）

これはひろっさんの現実観を出そうとして書いたものです。

チートや最強というのを逆手に取ったような描写が多いですが、大きな力もただの力であり、誰しもが求める強さというものも、それは現実という嵐を乗り越えるのに何の役にも立たないかもしれないということ表現したかったのです。

ピュアが『闇の書』に執着していた理由は、『自分を永久に消滅させる方法』を求めていたからです。

永遠の命って、そんなものだと思うんですね。

永遠に生き続ける人間が、まともな精神構造を保てる方がおかしいんです。

必ずどこかに異常を来たし、最後には自分に相応しい死に様を求め、それでも死ねない時は、何でもいいから自分の殺し方を探す。

RPGのラスボスには、そんな部分もあると思うんです。

（製作者が意図しているかどうかは別として）

最後に。

こうやって書きたいことを物語の主眼に置くと、モチベーションが違ってくるように思います。

感情移入もしやすくなりますし。

『魔法少女リリカルなのは 幻想郷の白き魔女』は、ここで一応の完結となります。

空白期やstsは、また様子を見てやりたいと思います。

多分、早くて半年後くらいになるのではないかと。

それではここまで読んでくださった読者の皆様、ありがとうございました

ました。
そして、
お疲れ様です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1890p/>

魔法少女リリカルなのは 幻想郷の白き魔女

2011年4月3日10時42分発行